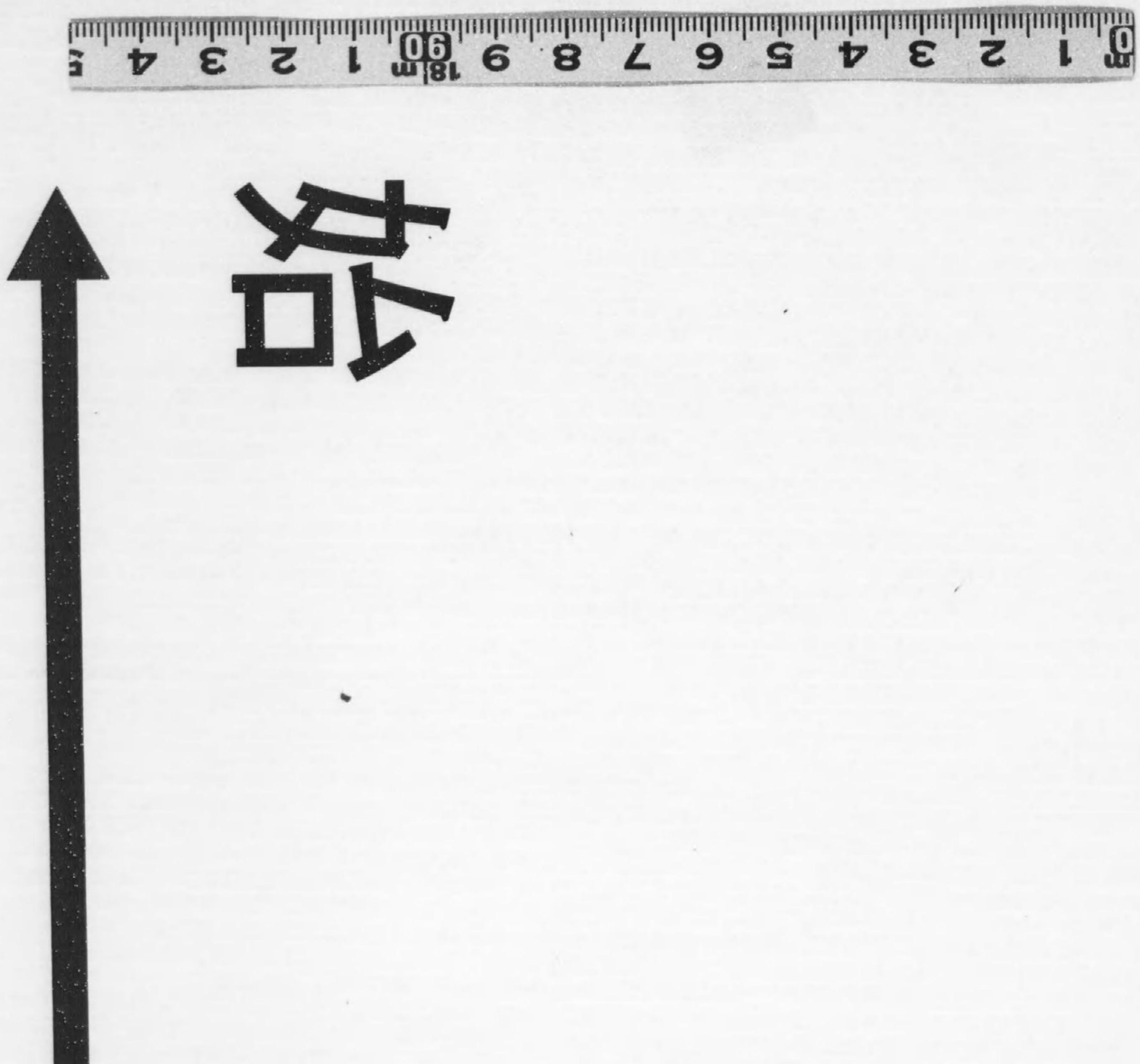

国立国会
51.10. 1
図書館

June 1976

6

先勝

13

日 月 火 水 木 金 土

特112

おもひの家（終編）

山田松琴

（一）噂

（一）

『柴原君、先日はどうも失敬だつた』

『呀、一忠君でしたか、僕の方こそ失敬しました、先づ昇つて下さい』

『邪魔になりやしませんか。それでは些と失敬しませう』一忠は靴を脱いで玄關を上つた。

書生は一忠の軍帽を受けとつて玄關傍の帽かけにかけて置いて、座敷へ案内す

る。

柴原へ些と自分の居間へ這入つたが直と出て來た。

『先日は飛んだ御迷惑をかけて濟まなかつた』と一忠は軍服の膝を胡坐にして、朝日を取り出して火を點けて居る。

『折角だつたのに殘念でしたね。あれからまだ行く先きは知れないんですかね』と柴原は自身で茶を入れて出した。

『知れないので母から叱言を貰つて弱つて居るんです』

『何處へ行つたのですかな』

『どうも方角さへつかないのに困つたですよ』

『あれが立花靜子で、國衛君とそんな關係になつて居た事を知つて居たなら、僕は餘處ながら十分の注意もなしそれとなく監督もするんだつたに殘念な事をした。殊に先達て、國衛君を拉ばつて來た時にそれが知れて居たならどうしても面會さしてみるんでしたに知らない者同士だから、垣一重の彼方と此方に居ながら、何も知らずに別れさしたのは殘念此の上なしでしたね。だが、國衛君も國衛君ですよ。あの

子供の泣き聲を聞いて居たのですから、何とか心づきのする事もあつただらうに。默つて歸つてしまつたんですからね』

『子供の泣き聲を聞いても、あまりの意外だから、氣がつかなかつたか知れない……そして此の隣の家はあのまゝですか』

『否、彼の翌日朝早く、僕等の知らない間に男が二人來て、封印のついた家具なんかを車に載して持つて行つたさうです。仍且、あの時、君と話した通り、何も彼も執達吏に押えられてしまつたので、止むを得ず、其の場で下女にも暇を出して眞實の着のみ着のまゝで何處かへ行つてしまつたらしいですね』

『だが、どうも、あの自働車が不思議でならない。僕はどうしても普通で轉居したのではないと考へて居るんです』

『無論、轉居する意志があつたのぢやなかつたでせうが、差押を不意に喰つて驚いて逃げ出したのでせうよ』

『その差押と云ふのが不思議なんです、靜子はそんな差押を爲れる如く事をする女

ちやないんだから』

『あの兄の進とか云ふのが非常な酒飲みおやと云ふぢやありませんか』

『それが借金でもすればするんだがどうも何だか尠も要領を得ないので、捜索するのにも一層困りますよ』

『國衛君は、そしてまだこんな事は尠も知つて居ないのですか』

『無論知らしてないんです。知らしては平野俊子さんとの間に障りになつて不可いと思ふもんだからね』

『國衛君と、令閨との間は、眞實圓滿なのですか』

『僕もあまり子爵の邸へ行かないので、詳しい事は知らないが、両親の談話では至極圓滿な如な事を云つて居ますよ』

『然ですか』と柴原は變な顔をして居る。

『君は何か聞きましたか』一忠は柴原の樣子を視て、氣にかゝるらしく訊いてみた。

『否、何も聞きはしませんが』と、些と躊躇した後『こんな事を云ふのは甚だ失敬ではあるが、親友の國衛君の爲だから露骨に云ひます、それとなく國衛君、君から注意される樣にしたいと思ひますよ……他ぢやない、國衛君の令閨となつて居られる俊子さん。あの女は一昨日午後だつた、僕が上野公園を歩いて居ると、どうも俳優らしい男と自働車に同乘して廣小路の方へ行かれたが、若しや、又以前噂のあつた如な行爲を、國衛君の眼を掠めて行つて居られるのぢやあるまいか、と、考へるのです。豈夫とは思ふんだが、注意をして置くに如くはないから、御參考までに云つて置きます。君から一度國衛君に、それとなく注意をして置いて下さい』

『……フーム、然ですか……』一忠は唸る如に云つた。

（二）噂

夕食を濟ましてから書齋へ這入つた佐久良中將は、朝日の煙を白う吐き出しなが

ら例の大な軀を椅子に凭した。

室内を照らす電燈の光りで壁間にかゝつた地圖へ眼をやつて居たが、腕を拱むと何か考へ出した。

『一忠が歸りましてございます』と扉を靜に啓けて夫人嘉久子の顏が覗えた。

『只今』と軍服のまゝで一忠がずつと這入た。

『什麼した。遲くまで？』と中將は暫りと一忠の方を視た。

『國衛の友人の柴原の許へ寄つて話しこんで居たもんですから遲くなりました』

『多少の要領を得たか』

『得ません。靜子の方に就いては更に得は所はありません』

『全態什麼したと云ふんでせうかね』と夫人も失望らしく椅子を前へ引き出した。

『靜子の事では要領を得ませんでしたが、今日柴原君から、どうも面白くない事を聞き出したのです』

『面白くない事とは？』と中將は卓の上へ両擘をついた。

『俊子さんの事です』

『どんな事を聞きました』と夫人は心配顏になつた。

『俊子さんが、どうやら又以前の不品行を始めたらしいのです。と云ふのは、一昨日でしたか、柴原君が上野の公園を歩行て居ると、俊子さんが俳優らしい男と自働車に同乘して廣小路の方へ行つたさうです』

『そんな事のある筈は無い』と中將は一言に打消した。

『でも、それはどうとも判明りません』と夫人は氣遣はしさう。

『柴原君は嘘を云ふ如な人間ぢやありません。必ず事實を云つたのです。然して國衛の爲によく注意をしてやつてくれと云ふのです』

『國衛に注意する？』

『然です。國衛が若し、俊子さんがそんな事はして居らないだらうと信じて居る所へ、突然こんな噂を他から耳にしたなら、どんなに不快に感じるか知れません。今までに既に靜子の事で女と云ふものに就いて妙な感情を懷いて居る所へ、又、自分

の妻の俊子さんが這々だと、他の者から聞かされたらどんな變な氣にならないとも限りません。それで、先づ此方の方から、それとなく俊子さんの外出や、擧動に注意する樣、國衛に云つてやつて置いた方が好いだらうと、這云ふのです』

『そんな事は要らぬ。元來平野子爵の家庭に成長た俊子がそんな事をする筈が無い俺は斷じてそんな事や事實と信ずる事が出來ん』

『それは貴夫があまりに信じ過ぎて居らつしやると存じます。既に今までに一度はそんな事もあつたのでございますから、絶体に無いとは云へないだらうと思ひます』と夫人は例日になく反抗の口を漏した。

『汝までがそんな事を云ふ、怪しからんぢやないか』と中將は叱り付けて、

『平野の家の者にそんな事のある筈はない』

『でも、若し、事實でしたら……』

『それが事實ぢやつたら、子爵に申し上げて、俊子に自殺を爲せる。夫國衛に對して、両親に對して、家名に對して、尙社會に對して、申譯の自殺を勸める。子爵の

娘ぢやからと云つて俺は許して置かぬ』

『そんな事は貴夫……』と夫人の云ふのを抑へて、

『我子とは云へ國衛に結婚を爲せる時に、俺は俊子を立派な婦人ぢやと云ふて國衛に結婚を强いて居る。その女が、今の話の如ぢやつたら、俺は國衛に對して申譯が無い。俊子に自殺を勸めて俺も自殺する』

『そんな馬鹿な事はありませんよ』と一忠は苦笑して『それよりも一度國衛に私が會つて、それとなく、俊子さんをよく監督する樣に云つて置きませう。その方が良策でせう』

『どうか然して下さい。國衛は靜子の事で失望して、又、俊子の事で、そんな事の心配を爲せては眞實可愛想ですからぬ』と夫人は太息を吐いて居る。

中將は太い眉を顰せて空を睨んで居た。

談話が斷れると、廣い邸の秋の夜が寂とする。

（三）愛の裏（一）

平野子爵は自分が統裁して居る政黨の黨員が、今回の縣會議員に當選したと云ふ電報を幾通も受け取つて、地方に於ける勢力の益々增大して行くのを喜んだ。然して今も秘書役をして居る男に命じて幾通となく祝電を出さしたが、自分にもペンをとつて名簿の上に圓點をつけて其の數を計へたりした。

一通りの要事が濟んで秘書役が出て往つた後で、子爵は葉卷の口を小刀で切つて火を點けた。フーッと吹き出す煙が紫色に靉びいて緩う流れて行くのを視ながら、會心の笑を口邊に漏らして居る。

『お父樣』と無遠慮に這入つたのは俊子である。

『御用は最う濟みまして？』

『まあ濟んだ如なものぢや。何か用意でもあるかの』子爵は例日の通り機嫌顏である。

『エ、、些と』と、俊子は父の前へ椅子を寄せた。

『何ぢや』

『お父樣は妾を大切だと思つてらつしやいますか、國衛を大切だと思つてらつしやいますか』

『飛んでもない質問を出すぢやないか。俺は二人とも大切ぢや。どちらも俺の爲にはなくてならぬ子ぢや』

『そんな月並なお答辭は欲しくないんですわ』

『ぢやあ什麼云へば好い？』

『假に妾を殺すか、國衛を殺すかと云ふ場合があつたら、貴父は何方をお斬りになりますか』

『若し那麼場合があつたらお前を助けると云ひたいが、國衛の方は義理のある子ぢや。國衛の方を救けねばなるまい』

俊子は身が戦う程嬉しかつた。が、態とツンと拗ねた顔をして、

『ぢやあ妾の方を斬つてお了ひなさるんですね』

『義理としてはそれが正當ぢやらうの』

『あゝ、妾は詰らない』

『何が詰らない』

『實の親にさえ疎されて居るんですもの』

『誰がお前を疎んで居る？』

『だつて今、然仰しやつたぢやありませんか、國衛を救けても妾の方を斬るつて……』

『そりや、お前が假令に訊いたからぢや』

『その假令が眞實になるんですもの妾詰らない』

『馬鹿な事を云ふもんぢやない』

『どうせ妾は馬鹿ですのよ、だからお父様にも疎まれるんですわ』

『お前は全体、何を云つて居るのぢや。一人で云つて、一人で憤つても俺には何が何だか些も譯が分らない』

『貴父は國衛ばかしを可愛がつて、妾を憎んで居らつしやるんでせ』

『那麽馬鹿な事はない』

『でも、今然仰しやいました。國衛は救けても妾は……』

『馬鹿ッ』

『馬鹿でようございます。貴父は國衛さえ居たら、妾はなくても好いんでせう。だから、今から、妾を、此の邸から追ひ出して下さいまし、妾は居ない方が好いんですから、今から、今から出して了つて下さい』と俊子は卓の上へ突俯した。

子爵は呆氣にとられた如な顔をして居たが、

『お前は何を云ひ出すのぢや。お前が不用な人間ぢやと誰かゝ云ふたか。そんな事を云ふものはあるまい。お前は此の平野の家の正統ぢやないか、お前がなくても可いなんて誰が云ふか。そんな馬鹿な事を云ふもんぢやない』

『だつて妾は……』と云ひかけたが急に顔を押えて『何でも可いんですから、妾を今日限り此の邸から出して了つて下さい、妾は居たくないんです』

子爵は鋭い眼をして何か云はうとした。

と、其處へ飛びこむ如に這入つた夫人は俊子の口へ手を當る如にして、

『コレ、お前は何をお云ひです』と一言叱りつけて『貴夫此れは最前から些し上氣して居る如でございます。どうぞお氣におかけなさらない樣遊ばして下さい』

『どうか爲だのか』『ハイ……』と夫人は躊躇した。

（四）愛の裏（二）

『何か事由でもあるか』と子爵は俊子と夫人の顔を等分に視て居る。

『何も事由なんかありません。妾は、此の邸を出して貰へば可いのです』と俊子が痛聲に云ひかゝるのを夫人は抑へる如にして、

『否ねえ貴夫。これは、何ですよ、國衛と何か云ひ合つたものと見えますのです』

『國衛と喧嘩したのか』

『と思ひます』

『ハヽヽ、それ位の事だらう突如に妙な事を云ひ出すから、俺は氣でも狂つたかとおもつて驚いた。國衛と喧嘩した位の事なら、さう何も心配する事はない。何程仲の好いものでも長い月日の間には、思はぬ感情の衝突もあるものぢや、機嫌の好い時許りでもない、時には見聞きするもの總てが癪に障る如な事もあるもんぢや。いや、時には喧嘩もして、お互の氣風を露骨に知り合ふのも好いぢやらう』と子爵は一笑に附して居る。

『お父樣、妾は國衛さんと夫婦になつて居る事は最う什麼しても厭になりました。何卒離緣遊ばして下さい』

『何ッ』子爵の笑顔は一時に消えた。

『これ、お前は何をお云ひですか、最前から妾にもそんな事を云つて、立いたり賣

つたりして、妾が承かなかつたら、又お父様にそんな事を云ふ、そんな事を國衛の耳へでも入れましたら、國衛がどんなに氣不味く感ふか知れません。そんな事は由戯にも云ふものぢやありませんよ』と夫人は他の者に聞かれはしないかと、四邊を視ながら叱つた。

『氣不味く感はれたつて關ひません』と俊子は態と聲を高くして『妾は今までだつて、些とも國衛さんに愛情を有つて貰つた事はないんですもの。好い感じを有つて貰つた事もないんですもの、此の上惡い感じを有たれても些とも苦には思ひません』

『これ』と夫人は制めて、お前はまあ何と云ふ事を大きな聲で云ふのです。小間使共に聽かれても好くないぢやありませんか』

『好くても惡くても、それに相違はありませんのですもの……』と俊子はハンカチフを顔に押しあて、『愛情も何もない、まるで氷の中に浸つて居る如な夫婦で暮して居るより、寧そ離縁して別々に獨身生活をした方が好いのですわ。妾も眞實此の

無味な夫婦と云ふものに愛想が盡きてしまひました。何卒斷然と離縁をしてしまつて下さい、ねえお父様、國衛さんの方には義理があつて此の邸を出すと云ふ事は出來ないでせうから、妾の方を出して下さいまし……然して、妾の出た跡で、あの立花靜子と云ふ女を引きとつて、然して國衛さんと夫婦にしてあげて下さい』

『馬鹿』と一喝したる子爵の聲は鋭く室の裡に響いた。

『何を云ひ出すかと思つて默つて聽いて居れば、好い氣になつて……立花靜子と云ふ女は、お前が何日か、此の東京へ置かない樣にしてくれと俺に云つた事のある女ぢやらう。其の女と國衛と今に何か醜い關係でもあると思つて、嫉妬心から、そんな事を云ひ出したのぢやらう。否、それに相違ない。國衛に限つてそんな事のある筈も無からうし、縱令、それがあつたにしてもぢや、お前は正妻ぢやないか、お前が邸を出ると云ふ事があるか。そんな事を云つて國衛に嫌な感じを與へやうと思つて居るのぢやらうが、そんな事は不可ん。女は嫉妬がましい言語を使つたり、又嫉妬の心を持つと云ふのが一番によろしく無いのぢや。總て夫婦の愛情を殺ぐのは其

の嫉妬が何日でも先きになるからちや。よく慎んで居れ。今後そんな馬鹿な事を云ひ出すと斷じて許さんぞ』

『……でも……』と俊子が云ひかゝるのを、

『執拗い。そんな呆氣た事を耳にして居る餘分な時間はない。康、お前もそんな事に關つて居るんぢやない』と云ひ捨てにして突と扉の外へ出た。

『それ御覽なさい、遂々お父様の御機嫌を損じてしまひました』と夫人は困つたらしい顔になつて居る。

『噫、仍且駄目だわ……』俊子は顔を押へたまゝ卓子の上へ伏して居た。

（五）追　追（一）

『一兩日は飛んだ御無沙汰をして居りましたが、お軀は如何です。貴女お一人限りでは御不自由でせうが、仍且お寢みになつて居る方が好いですよ。どちらかと云へば、まだ眞實に快いとは云へないんですから、無理に然やつて起きて居らつしやるのは好くありませんよ』越田は荒い縞の背廣服の膝を窮窟さうに坐つて、金口の捲莨の煙りを吹き出しながら、靜子の顔を金緣眼鏡の下から凝然視て居る。

靜子はそれを厭ふ如に、始終俯向き勝になつて居る。

『有り難うございます。だけど最う御承知の通り、妾が靜と寢て居るやうな事は出來ない身になりましてございますから……それに、お蔭で體軀も少しは良い樣にも存じますので、寢んで居りましてクサ〳〵考へ事ばかりして居るよりはと思ひまして、這して起きて居りますのでございます』

『御事情はよく承知して居りますが御病氣のお軀であまり無理な事を爲さるのはよくありませんよ。仍且、女中でもお置きになつては如何です』

『たゞ今の身ではそんな贅澤な事も云つて居られなくなりましたのですよ』と靜子は寂しい笑顔を漏した。

『贅澤ぢやありません。貴女のお軀の爲ですよ。失禮ですが私がそれ位の事は何ど

かしても好いのですから』

『お志は有り難う存じますが、貴下からお世話を戴く理由も何もありませんし、そんな厚顔しい事のお願ひも出來ません』

『否、理由の筋のと、那麽他人行儀に出られては私の方で何とも云ひ出しやうがありませんが、私も今まで這して出來るだけの事はして來て居るのですから、此の上に最うそれ位の事は爲ても何も恩に被て戴く事はありませんよ』

靜子は越田の顔を屹然視上げて、

『失禮ですが……今貴下は、まで出來るだけの事をして來た、と仰しやつた如でしたが、それは何の事でございます』

『エ？』と越田は妙な顔をしてみせて『今まで出來るだけの事をしたと云つたのですか？。それを貴女はまだ御存じちやなかつたのですか？』

『妾は何の事か尠しも氣がつきませんが』

『進君から貴女は何もお聽きになつて居ませんか。今までの私の事を』

『ハイ、何も承はりません』

『ハア、然でしたか。それはどうも、否、實は何ですよ。最初私が貴女を診察したり投藥したりしましてから、今日まで未だ一錢の藥價だつて戴いた事はないのですそれのみならず、進君から、屢々私へ御話がありまして、靜子があの通り病氣であるもんだから、何處からも收入の途が無い。それで時々非常に困るからと仰しやるので、多額ではありませんが、それでも可なりの金の融通もして進げてあるんですがそれを貴女はまだ尠も御存じではありませんか』

『マア』と靜子は驚ろきの眼を睜つて『そんな事はございません。妾は何も貴下のお世話を受けたり御迷惑をかけたりする理はありませんもんですから今までだつて藥價も診察料も大抵の見積りをして、皆兄に渡して置きましたのでございます。況して、貴下からそんなお金を拜借したりして居る事は夢にも存じません』

『然でしたか、それでは進君が、御病氣中の貴女に心配をかけまいと思つて秘して居られたか知れません。それは飛んでもない事を饒舌つてしまひました』と越山は

態と頭を掻いて居る。

『それでも藥價なんかをお拂ひして居ない筈はないと存じますが』

『それでも事實そんなものを頂いた事はありません。又、私はそんなものを戴く意志ではなかつたのですからね』と越田は靜子の顏を視てニヤリと笑つた。

（六）追　迫（二）

『然し、靜子さん、そんな金錢の事なんかはどうでも可いぢやありませんか、元來私が貴女に對して、金の問題を先にして今まで好意を盡して居たのでない事は貴女だつて御承知で居らつしやるでせう』と越田に殊更らしい笑顏を視せて『それを御承知で居て下さるんでしたら、そんな水臭い事を仰しやらなくても好いぢやありませんか』

『水臭い事を云ふのではありません。妾は當然の事を云つて居るのでございます』

と靜子はどこまでも嚴として居る。

『當然と云へば、私も職業の事ですから、藥價も戴かねばならないし、診察料も頂戴しなきやあならん。又、御用達してある金もお返しを願はなきやあならん事になりますが、そんな事を今更他人らしく勘定だてる事はないでせう。貴女さえ私の好意を好意として受けて下さるなら、私はそんなもの一錢だつて請求を爲やうとは思つても居ない。のみならず、これからも出來るだけの事は私の力で何とか爲して貰ひたいと思つて居るのですからね』

『御厚意はどこまでもお禮を申します、けども……』

『けども、と仰しやつても、失禮だが、貴女の其のお軀で今何を爲うとなすつても出來るものではありません。殊に、其の小さい國雄さんがあるぢやありませんか、早い話が、お乳汁の出なくなつた貴女が、國雄さんに飲ましてお進げなさる牛乳の代、それだけでも容易の事ぢやありますまい。以前の立花靜子さんなら、そりや甚麼贅澤もお出來になつたでせうが、失禮ながら、今の貴女にはそれ程の餘裕もお有

りなさるとは見受けません。貴女のお軀で何も出來ない、御生活向きの餘裕もないとなると、貴女だつて多少お考へなさらなきやあなるまいかと思ひます。甚だ立ち入つたお話ではありますが、これは貴女のお爲に御參考までに申しあげるのですから、どうかよくお聞きとりが願ひたいのです』

靜子は其の禮を失つた越田の言語が涙の零れる程癪に障つた。

『仰しやる通り、妾は音樂會にも出られなくなつて居ますし、他に何を爲る事もできませんし、其の上遊んで生活するだけの餘裕もありませんが、たつた一人の國雄を養ふだけ位の事は、どんな事を致しましても、妾は立派にやつて見たいと思ひます。ですから、他のお方の御助力を受けやうとも、お世話に預らうとも思ひません御親切に仰しやつて戴くお言語は厚くお禮を申しますが、妾は仍且妾の自由に何誰のお指圖も受けまいと存じて居ります』

『なる程御立派なお心です……と云ひたいが、それは貴女御自身でお苦しみなさる事になりやしませんか』

『假令苦しみましても關いません。他日になつて、國雄の肩身を狹めるよりはどんなに氣が大きいか知れません』

『では何ですか、貴女は私の厚意を受けないと仰しやるのですね』

『貴下から御厚意を受ける理はありませんのですから』

『宜しい。それでは、今まで私が盡した厚意も水の泡となつてしまひました。詮方がありませんから私は貴女に對して今までの總ての請求すべきものを請求致しますが、それでも宜しいか』

『ハイ、致し方がございません』

『請求しても差し閊へはありませんね』

『御請求なさる權利のあるものを御請求なさるのですから、妾の方では何とも致し方がございません』

『宜しい』と越田の顏は俄に嶮しくなつた。

『その代りお願ひ致して置きます。今日今限りどうぞ妾の家へは一切來らつしやら

ない事になすつて下さい』靜子は屹然云ひきつた。

『何ッ』と越田は拳を握つたが、直に笑ひ顔を作つて『ハ、、、こりや些とした言語の間違ひから飛んだ事になりましたが、靜子さん、貴女だつて然まで仰しやらなくても宜いでせう。今まで私の仕向けて居るのを御覽になつても大概の御想像もついて居るでせうから。ねえ靜子さん』と、越田の眼は情慾に燃えて居る。双の手は突如靜子の肩へかゝつた。

（七）追　迫（三）

『何をなさるんです』靜子は越田の手を拂ひ除けて、身を退いた。

『然厳しい顔をなさらなくても宜いでせう』と越田は再び靜子の手を握らうとする。

『失禮ぢやありませんか』靜子は顔を眞蒼にして憤りに涙さえ眼に浮めて居る。

『失禮かも知れんが、そんな他人行儀な事を云ふ間柄でもないぢやありませんか』

越田は落ち着きはらつて莞爾して居る。

『他人行儀つて、貴下とは何の縁りかゝりもない他人です。その貴下が女一おもつて餘り失禮な事をなさると、妾も默つては居りませんよ』

『ハ、、、ぢや什麼なとなさい。私は貴女の爲なら、どんな事をされたつて構はないのですから』とぢり〳〵靜子の方へ身を寄せて來る。

『御歸りなさい』と靜子は叫んだ。

『歸らうと思へば歸ります。だが私の意志が十分貴女に得心されるまで歸りません今日は其の覺悟をして來たのですから』

『貴下の意志なんか承はる必要はありません。お歸り下さい』

『靜子さん。最う斯なつてしまつたら、笠も兜も脱いでしまひます。私が貴女と結婚したい希望をもつて、今までどれ程苦心して居たか、又どれ程貴女に對し熱愛を運んだか、どれ程の眞實を盡したかは、貴女だつてお心附きにならん事はないでせ

う。お心づきになつて居らつしやるなら、然情ない事ばかりを仰しやるもんぢやありません私の意志はよく進君も知つて居られる筈で、貴女と結婚する事も、其の國雄さんを私の子とする事も、貴女の希望があれば甚麽事でも納れやうと云ふ事も皆私から進君までには云つてあるのです。貴女は進君から其事はよくお聽きになつて居らつしやるでせう。お聽きになつて居らつしやればこそ、今日まで私の診察も受け藥も受け其の他の厚意をも受けて居て下すつたのでせう』

『貴下から受けた藥や診察に對しては進から貴下へ代が拂つてある筈です其の他の御厚意と云ふものは妾は何も知つた事ぢやありません』

『否、進君から私はまだ一錢の藥價だつて貰つた事はありません』

『兄に妾は渡しましたのです。だけど、それを受けないと仰しやるなら、妾から最一度お拂ひ致します。そしたら貴下から厚意、厚意と云つて戴く理はないんですから』

『貴女は私の厚意を金を拂つて帳消しにせうと仰しやるのですか』

『貴下から御厚意を受ける事は妾は絶体に好みませんのです』

『飽くまで私を好まないと仰しやるのですか』

『ユ、、女一人と侮つて、禮を失つた事を云つたり爲たりする樣な方は妾は大嫌ひです』

『然ですか。然仰しやるなら私も云ひ樣がありません。厚意を厚意として受けて貰はれ難ば商賣氣になるより詮方がない。どうか今までの往診料藥價其他車馬賃、等總て御支拂ひを願ひます』

『お拂ひ致します。お明日お來で下さいまし』

『今お拂ひを願ひますよ。明日といふ事は私の方の都合で困りますから』

『今と云つて、……』と靜子は當惑したが、今此の場合、騎虎の勢ひ待つてくれとば云へなかつた……『止むを得ません。此の指環を差し出します。これより他には最う何一つもありません。此の指環一つ限りなんですが、これでも金剛石ですからお金に代えて戴けば可なりの額にはなりませう。これをお持ちなすつて、此れ限り

妾の家へ來らつしやる事はお廢めなすつて下さい』と靜子は口に出して强く云つた。が口惜しさと、腹立たしさとに胸が一ぱいになつて、涙は止め途もなしに流れて居る。

越田は靜子の顏と指環とを視比べて居たが、

『宜しい、それでは此品を一時お預り致しませう。然し靜子さん。此の世は慾の世の中ですよ。よくお考へなすつて下さい』と指環をとつた。

『お持ちになつたら疾くお歸り下さいまし』

『失敬します』

靜子は口惜し涙に胸の張り裂けさうなのを凝然押へて居る。

越田は忌々しさうに靜子を視やつたが思ひきつて突と起つた。

靜子は此の指環が我身の罪にならうとは此の時思ひも及ばなかつた。

（八）待合

『御待合、菊吉』と洒落た草書で書いた門燈の下をくゞると、玄關までが迚も敷石になつて、左右には常磐木の植こみがある。

玄關の正面には金屏風をたてゝ、花形の電燈が眩い程明るい光りを放つて居る。

其の玄關先へ引きこまれた俥から突と降りたのは俊子である。

『來らつしやいまし』と出迎へた女中が兩手を突く。

『來て居るでせうね』と小聲で訊くと、

『最前から、お待ち兼でございます。何卒こちらへ』と案内ずる。

よく拭こすつて鏡の如になつた廊下を通つて突き當ると、鍵の手になつた細い廊下が、庭園の眞中を演劇の橋がかりの如になつて居る。

其處を渡りきると障子にパッと明るい光りの映した離座敷がある。

女中は其の障子を啓けた。

「何卒」と手を突いて居る。

俊子は突と這入つた。

女中は障子を閉めて置いて廊下で以前の方へ小走りに去る。

「來らつしやいまし」と床の前に胡座を組んで居た男が輕く頭を下げる。

「大變待つて？」と俊子は其の前の座蒲團を引き寄せて坐つた。

「大分待つてました」と帶の間から金時計を出して見る。

「濟まなかつたわね。疾くと思つてたんだけど、阿母様が何だか愚圖々々云つてたもんだから」と其處の茶盆を引き寄せて、自分で茶を入れて居る。

「お邸の方へ何か知れて居るんだつか」と俊子の顏を電燈で透す如に視る。

「知れる樣にと願つて居るんだけど其の割合には知れないものね」

「知れちや大變でせう」

「好いのよ」

「何やら變な態だんな、全体どないになりまんのや」

「どうもならないのよ、たゞ妾は貴郎と會ふだけ、それだけで好いのよ」

「先達から何やら狐に誑まれてるやうで變な工合や」と考へた態をして「全体、此の市川登鴈をどんな芝居に使やはりまんのや」

「そんな事什麼でも好いのよ。たゞ妾の云ふ通りに、何處へでも出て來て貰へはそれで好いの」

「そやかて、演劇の筋が判りまへんによつて、何やら怪訝しうて氣味が惡うおまつせ」

「心配して貰ふ程の事はないんだわ」

「貴婦の事やよつて心配はしてやしまへんけど、それでも、何だか氣味の好えもんやおまへんな。以前は貴婦にえらい負にして貰てたんやけど、お聟はんを貰わはつてから、私の方は薩張り上つたり屋にしてしまわはつて、暑中の挨拶狀を出しても返事も呉れはらなかつたのに、突然先日電話で呼び出しなはつて、どう爲やはる

のか思ふたら自働車に乘せて、拉ぱり廻はして、それから最うこれで好えよつて歸れ……何が何やら私に薩張り判らへん。あんなどくしよな事おまへんせ』

「濟まなかつたわ、其のお禮と云ふのぢやないけど、此金少しですけど煙草でも買つて下さいな」と紙に包んだのを膝の上へ投げ出した。

「そんな金貰たらあきまへん、そんな事は爲んといとくんなはれ」

「好いのよ、ほんの僅ばかしよ』と無理に押しつけた。

「濟みまへんなあ」と頭を抱へて「そやけど私はどうして呉りやはりまんのや。仍且以前の如に最負にして呉りやはりまんのか」と指環の嵌つた女の如白い手を出して、俊子の手を緊と握つた。

「何をするのです」と俊子は汚いものに觸れた如に拂ひのけて『失禮だわ妾は以前と異つてよ。平野國衛と云ふ立派な良人があるんですよ」

登鷹は呆れた顔して、

「そやつたら、私どないなりまんのや？」

（九）覺悟の罪（一）

平野子爵は何日になく不機嫌な顔して我居間へ突と這入つた。然して後から從いて來た夫人の顔を見て、

「康、俊子は居るか、居るなら直に此處へ呼びなさい」

「ハイ、御用事でございますか」と夫人は氣遣はしさうに子爵の顔を視上げる。

「用があるから呼べと云ふのぢや」と聲にも角がたつて居る。

夫人は何となく氣づかはしさうな顔をして居たが、否む事はできないので呼鈴を鳴して小間使を呼んで、俊子に直此室へ來るやうにと命じさせた。

「貴夫、お召し變へにはなりませんか」と夫の顔色を窺ふ如にして夫人は聞いた。

「これで好え」と無愛想答辭をして机に凭れた。

「あの……何かお氣に障る如な事でも……」と夫人が云ひかゝるのを子爵は引奪る

如にして、

「煩累さいちやないか。俊子を呼べば判明る事ぢや」

「ハイ」と夫人は詮方無しに口を噤んだ。

子爵は葉捲莨に火を點けて無聞に煙を吹き出して居る。

襖を靜に啓けて俊子が這入つて來た。

「俊、其所へ坐れ」子爵の聲は鋭く響いた。

「ハイ」と俊子は母の傍へ摺り寄る如にして坐つた。

「康、お前も聽いて置け」

「ハイ」と夫人も軀を固くした。

「俊、お前は國衛と云ふ立派な良人のある事を忘れやしまいの」穏であるが力のある聲が頭部から壓する如である。

「エヽ」と俊子は俯向く。

「良人のある者が他の男と密會したり、怪しい所へ出這入りしたり、そんな事をし

て、若し公然の沙汰にでもなれば、姦通罪と云ふ法律の制裁を受けなければならぬ事を知つて居るか」

「……」俊子の顔は蒼くなつた。

「法律の罪人になると云ふ事を知つて居るか。姦通と云ふ二字が、女にとつてどれ程忌はしい、どれ程惡むべきどれ程穢はしい事であるかそれを知らぬ事はあるまいそれとも知らなかつたか」

「アモシ、何か俊子にそんな事でもありますのですか、貴夫のお言語では容易ならぬ事の如に存じますが」と夫人は餘りの事に聞きかねて詰る如に云つた。

「呆氣者」と子爵は夫人に一喝して「お前がそんな迂濶だから、飛んでもない事が出來るのぢや。傍にじつと居る母親の注意が足りないから、親まで赤耻を掻く如な事が出來るのぢや。俊子は姦通して居るのぢやぞ」

「マア貴夫……」

「汝は默つて居れ」と叱りつけて「俊、お前は昨夜は何處へ行つた？。先づそれか

ら云へ」

「妾……」と俊子は顔も擡げ得ない。

「何處へ行つて居たか、明瞭と云つてみよ」

「……何處へも……」

「行かんと云ふのか。行かないものが何故十時過ぎてから邸外から歸つて來たのぢや」

「あのそれは……」

「瞭然と云へ」

「久し振りに南部様をお訪ね致しまして」

「南部？……南部の邸へ往つたと云ふのか」

「ハイ」

「汝、親を誑さうとする。怪しからん奴ぢや」と拳が固まる。

「否、眞實でございます」

「南部の邸が、あんな濱町にあるか、菊吉と云ふ待合の看板が出て居るか」

「……」俊子の鬢は戰いて居る。

「それでも南部ぢやと云ふか」と、聲は一層鋭くなつた。

夫人はハラ〳〵した。

（一〇）覺悟の罪（二）

「答辭があるか」と子爵の膝は前へ出た。

「俊子、お前はまあ、那麼所へ往つた事があるのですか、よもやそんな所へ足を踏み入れる樣な事はありますまい。何かの間違ひですなら間違ひである事を瞭然とお父樣に申上げなさい」と夫人は傍で氣を揉んだ。

「默れ。俺が詰問をして居る傍から餘計な口をいれる事は許さん。殊に、庇護だてする樣な其の言語はもつての外ぢや」と子爵の顏には癇癪の色が漲つた。

夫人は口を噤むより詮方がなかつた。

『俊、返辭をせんか。南部の邸が何時濱町へ轉つたか、南部が何日待合を開業したか、返辭をしてみよ』

『ハ、ハイ、何とも申し譯がありません』と俊子は突俯した。

『マア、お前、そんな所へ往つたのですか』と夫人の聲は顫えた。

膝に突張つた子爵の両手は戰いて居る。

『怪しからん奴ぢや』と、突俯した俊子の背へ鋭い眼の光りを投げて『此の親が國衛に何と云つて辯解が出來ると思ふ？。佐久良一家の者に對して何と云つて詫をするのぢや。世間へ向つて什麼申し譯をするのぢや。此の平野正俊我娘に家名に泥を塗らして祖先に對しての謝罪はどうしてするのぢや……畜生の行爲をした汝を斬つて捨てゝ此の親も自殺をして詫をするより途はない。が若し汝に多少の良心があるなら此親が斬るまでもなく此場で自殺を爲い』

『自殺なんかは人道の違犯ですわ』擡げた俊子の顏は凄い程蒼い、眼は怪しい輝きがある。

『何ッ』

『妾は自殺なんかして詫をする程の罪を犯した覺えはありませんわ。尤妾は濱町の待合へ行きました。然して以前から最負にして居た俳優の市川登雁と會ひました。それが什麼して貴父の仰しやる如き大きな問題、否、罪になるのでせう……男の方は誰でも待合なんかへ公然と這入りこんで、然して公然に藝妓を買つて遊んで居らつしやるぢやありませんか、藝妓を買ふ所ぢやない公然娼妓を買つて遊ぶ方もあるぢやありませんか。男の方が自分の慾を滿す爲に藝妓や娼妓を買つて遊ぶのを何とも云はないで、女ばかりを責める法はありますまい。女だつて仍且人間ですわ男の方のなさる事を女が爲たつて差閊はありますまい……今も、お前は良人のある事を忘れたかと仰やつた如でしたが、良人が何でせう。妻のある男が藝妓買ひをしても何とも答めない世間なら、良人のある女が、俳優買ひ藝人買ひをしたつて咎める理屈はないぢやありまもんか。況して妾は眞實の夫婦ぢやありません。たゞ表面

だけの裝ひ夫婦です。互に愛も情も無い石を二つ寄せた如な夫婦です。妾がどんな事を爲たつて良人から叱責る權利はありません。妾は咎められる程弱い義務もありません。妾が待合へ往つたのを惡いと云つて憤るのなら勝手に憤らして下さい。妾が俳優に會つて來たのが氣に要らないと云ふなら、妾と、妾と夫婦の、夫婦の緣を切つて、そして自分の好いた女と夫婦となるのが好いんです……妾は、何も詫る事も辯解する事もありません」

「コレ」と夫人は堪り兼て「お前は、お前は、お父樣に向つて何と云ふ事を申し上げるのです。氣でも狂やしませんか、よく氣を落ちつけなさい」

「康、其所退け」と烈火の如になつた子爵は突如起つて俊子の頭髪を引掴んだ「畜生の耳に人間並の言語が通じると思ふか。畜生には畜生らしい成敗が要るのぢや」と云ひつゝ、俊子を庭園へ引き摺り下さうとする。

「あ、貴夫、ど、どうぞ、どうぞ暫時お待ち遊ばして、妾、妾から、よく〳〵云ひ聞かせますから、どうぞ」と夫人は子爵に縋りついた。

「エッ、汝は退け」と子爵は拂ひのけて「その甘つたるい言語で這麼畜生にしてしまつたのぢや……此の畜生には、畜生の骨に滲みる樣俺が制裁を加へるのぢや」

夫人の制めるのを蹴り退ける如にして、子爵は無慙にも俊子の頭髪をもつて庭園へ引き摺り下した。

（一一）覺悟の罪（三）

「あゝ貴夫、そ、そんなお手荒な事を遊ばして、若し、若しや傷でもできましては」と夫人は駈け寄つて遮ぎらうとする。

「傷がなんぢや。殺して了つて、皆の者へ詫をせねば此の正俊の顏が立つと思ふか腐つた此奴の肉も骨も粉になるまで打つて、碎いてそして皆の者に此の正俊が辯解をするのぢや」椽先にあつた、弓を切つて作つた鞭を片手に、子爵は俊子の頭髪を引掴んだまゝ放さないのである。

「御尤でございます、御立腹遊ばすのは御尤でございます。俊の惡いのに相違ありません。妾からお詫を申し上げます。どうぞ、何卒、お手荒い事を遊ばさずに、お許し遊ばして下さいまし。これ、俊子、お前さんも疾くお詫をなさい。お前さんが惡いのです。お詫をなさい、お詫を……」と夫人は一生懸命に子爵の鞭を持つ手に取り縋つて居る。

「妾、妾は、何も、何も、お詫する理はありません」と俊子は泣き聲を絞つて「殺すと仰しやるなら、殺して戴けば可いのでございます。妾は、そ、そ、それが、希望なのでございます」

「そんな事を云つて什麼するのですお前さん氣が狂つたのですか、疾く、疾くお詫を……」

「煩累い、退け、人間の道を踏み外した畜生を平野の邸には置けないのぢや。況して、殺されるのを希望ぢやと云ふ奴を生存して置く必要はない。こんな奴を生存して置けばどんな事をして親を泣かせ、世間を毒するか知れぬのぢや。腐つた骨の髓

に親の慈悲の鞭を受けて死んで了へ」夫人の手を振りきつた手の鞭は風をきつた。

「ア、、もし」と夫人は其の下へ這入つた。

「汝、退かんか」

「何卒、どうぞお許遊ばして……」と夫人は俊子の上へ自分の軀を投げた。

「退けッ」と聲と一緒に俊子は頭髪を持つて引き摺られた。

「ア、ッ」と俊子の悲鳴。

「貴夫、待つて下さいまし」と夫人は轉ぶ如に纏はる。

「汝ッ」と子爵の鞭は續いて俊子の上へ落ちて居る。

「呀！」と云ふ俊子の悲鳴は臓腑を抉る如。

「貴夫、そ、それは亂暴でございます。俊子、お前疾く、疾くお詫をなさい」と夫人は狼狽る。

「否、妾、妾はお詫する理由はありません。妾は、國衛さんを良人として居るのが不滿なのでございます、そ、それで妾は、妾の自由にしたまでゝございます……そ

れが、それが惡いと仰しやるなら、どうともなすつて下さい。妾は什麽なつても關ひませんのです」と俊子は悲痛な聲を絞つて居る。

「まだ、那麽事を」と夫人は俊子の口へ手を當てやうとする。

「否、關はないでおつて下さい。妾はどんなに打たれても、假令殺されても、妾は妾の自由を自由にするんです。良人から滿足な愛を得られない代りに他から滿足な愛を得やうとするんです、それが惡いと仰しやるなら、今の良人を離緣して、……良人を離緣する事が出來なければ、妾を、妾を、此の平野の邸から出して了つて下さい、そして國術さんには子まであるあの靜子さんを呼んで夫婦にして進げて下さい。妾は、妾の自由に爲たいんですから……此の邸を出して了つて下さい。それがそれが出來なけりや殺して下さい」

「殺してやる」と子爵は俊子を飛び石の上へ捻ぢ伏せた、其の背を踏みつけて、兩手で鞭を振りあげる。

「御前樣、お待ち遊ばして」と、鞭振りあげた子爵の手へ取り縋つた者がある。

（一二）覺悟の罪（四）

「何を爲る？」子爵は縋つた者の顏を視た。

小間使の富が息を喘ませながら、眼に一ぱいの涙を溜めて縋つて居たのである。

「御前樣、まあお待ち遊ばして下さいまし。お願でございます」と富は一生懸命である。

「お前等の知つた事ぢやない、退け」と子爵の顏は怒りに燃えて居る。

「否、妾は、何も彼も存じて居ります。若奥樣のお心裡はよく存じて居ります。存じて居りながら、こんな、こんな酷い目にお遇ひ遊ばすのを默つて餘處に視て居る事はできません。若奥樣のお心裡を妾から申し上げます。何卒、暫時、暫時お待ち遊ばして下さいまし」と富は力限り子爵の持つた鞭を拐ぎ放した。

「俊の心裡を知つて居ると云ふのか、不貞な事をする女の心裡を？」と子爵は睨む

如に富の顔を視つめた。

「決して不貞ではありません。若奥様は……」と富の云ひかゝるのを俊子は狼狽て、制めた。

「富、お前は、お前は、何を云ふつもりなのです。默つてお居でよ。何も、何も知らないで居る癖に」

「否、默つては居られません。こんな酷い目におあひ遊ばすのに默つては居られません。いくら貴婦の仰せつけでも、默つて見ては居られません。妾に云はして下さい」

「否、云つたら承きません。お前は、妾を大切だと思つたら、妾を可愛想だと思つたら、何も、何も云はないでおいてお呉れ。懇請だから默つて、默つて居て頂戴……」俊子の聲は涙に消えた。

「でも、餘りですもの、此の、此の酷ひ目にお會ひ遊ばすのを妾が、妾がどうしてどうして看過ごして居られませう。お願ひですから云はして下さい」

「云つたら、妾は承きません。此の上にまだお前が、妾の匿して居る事まで云つてしまつたら、妾は、どんな慘酷目に會ふか知れません。妾を、可愛想だと思つたらねえ、可愛想だと思つたら、何も云はないで、妾の希望の遂げられるまで、何も云はないで默つて、頂戴、ね、ねえ、懇請よ」と涙の眼で賴むだ。

「だつて、だつて妾、貴婦が、お氣の毒です。どうしても此のまゝ默つては居られません。どうぞ、どうぞ云はして下さい」

「云ふ事があるなら云へ、まだ何か俊が匿して居る事があるなら云へ」と子爵は急いて居る。

「申します。申さなくてはなりません」と富は云ひかゝる。

「富、お前は承いてくれないの、妾を、妾を此の上苦しめるの、そして妾を殺して了ふつもりなの」と俊子の聲は疳高い。

「だつて貴婦……妾に、妾に、云はして下さいな」と富はそこへ泣き伏した。

「妾を可愛想だと思つたら、ねえ、可愛想だとおもつて、何も、何も云はないで、

默つて、おくれ。妾は、良人の目を掠めて、待合で情夫の方と密會したのだから、これで、國衛さんが、妾を捨て、下すつたら、妾は、眞實の氣儘が出來るんだわ。以前の如に、誰に氣兼もなしに、好きな事ができるんだわ。國衛さんだつて男だわ これで妾に愛想が盡なかつたら、嘘なのよ。屹度、必然、捨てゝしまつて下さるに相違ないわ。捨てゝ下すつたら妾は本望……嗚、國衛さんに捨てられたら妾は……妾は本望だわ」俊子の聲には肺腑を抉る血が混つて居る。

「お前はまあ、何と云ふ情ない事をお云ひです」と夫人はあまりの事に言語もつげない。

「最う許してはおかん」と子爵は俊子に飛びかゝらうとする。

「お父樣、お待ちなすつて下さい」枝折戸を啓けてずつと這入つたのは國衛である。

子爵夫婦は消えだい如な心で顏を視合はした。

國衛の聲を聽いた俊子は其の場へ突俯した。

「貴婦」と富は俊子の手をとつて泣き倒れた。

《一三》覺悟の罪（五）

「お義父樣、お待ちなすつて下さい。俊子が甚麼事を致しましたか知りませんが、惡い點がありますなら私からお詫を致します。何卒お許しなすつて下さい」と子爵を宥めておいて「俊さんお前はどんな事を爲たかそれは知らんが、お父にさまが、遂ないこんなに甚く御立腹なさるのは、何か非常に好くない事がお前にあるのでせう。私からお義父さまにお詫はするが、お前からもお詫をなさい……義母樣、兎も角もお義父樣をお座敷へ」と迂路々々して居る夫人へ眼で知らした。

子爵は國衛の手前と、夫人に宥められるのとで、鎭らぬ怒りを無理に抑へて、鞭を投げ出して置いて座敷へ上つた。

泣き倒れて居る俊子を國衛とお富とが介抱して漸く座敷へ連つて上つた。

國衛は義父の前へ両手を突いて、

「事由はよく知りませんが、今までに無い御立腹は、俊子に非常な失態があつたに相違ありますまい。更めて私からお詫を申し上げます」

「否、お前から詫を云はれては、俺等は何とも云ふ事ができなくなる。詫は俺等からお前に云はねばならぬのぢや」

「そんな事はございません」

「否」と、子爵は夫人と顔を視合はして「國衛、俺は此の娘を殺して然して、俺の此の腹でも切つてお前に詫を爲ねばならぬのぢや」

「ハ、、、大變な騒ぎになりますね、然し、お義父さんから御折檻を受けねばならぬ如な事をしたのは俊子です。俊子がどんな事をしたか、それは知りませんが、俊子を妻として居る私は。俊子の罪をどんな事でも引き受けてお詫をせなければならぬ義務があると思ひます……ねえ義母様」と國衛は夫人の方へも笑顔を向けて「口廣い事を申して恐れ入りますが、俊子は今では私の妻です。お義父様や義母様の子に

相違はありませんけども、今では、お義父様や義母様ばかりの俊子でなくて、此の國衛の妻としての俊子です。ですから、此の俊子にどんな事がありましても、それは、御両親たるあなた方の罪でなく、又俊子だけの罪でもなく、其の夫たる此の國衛に多くの責任と罪とを負はねばならんと思ひます。今、お義父様が俊子を御折檻なすつた、其の事の理由は知りません。私は今突然庭園で聲を聞いて驚いて來ましたのですから、事由は知りませんが、假令……假令ですね……此の俊子が、不貞な行爲をするとか、或は私の顔の汚れる如な事をするとか、然云ふ事が夢にあつたとしても、それは誰の罪でもない、此の國衛の不德からです。罪は此の國衛にあるのです……たつた一人の妻、一生互に相愛し合はふと結婚の夜に誓つた妻、其の妻に反かれると云ふのは、良人たる此の身にそれだけの德がないのです。妻の心を自己一人に傾けさせるだけの德、或は力が無いのです。又最一言語を變へて云ふと、妻の心を滿足させるだけの熱烈な愛情それが缺げてるからだとも云へるでせう。どちらにしても罪は此國衛にあるのです。今云つた如な場合が假にあつたとしても、罪

が其の夫たるものにありとすれば、其の他の事は無論、夫たるものが責を負ひ罪を負ふて、妻に代つてお詫をしなければなりません。私は、その心で、お詫を致します」

「まあよく云つて下すつた……然もそれでは猶更妾等が面目がなくて……」と夫人は鼻をかんだ。

「俊」と子爵は膝を伸り出して「あれを聽いたか、國衛のあの言語を聽いたか、聽いても愧しいとは感はぬか」

俊子は堪らなくなつて思はず泣き聲を立てた。

「あ、お義父様、お赦し下すつたのなら、何卒最う何も仰しやらない樣にして下さい、俊子には私から又能く云ひ聞かせますから」と泣き伏した俊子の肩へ手をかけて「俊さん、最うお義父にもお詫をしたのだから、彼方へお行でなさい。そして其の亂れた姿態もお直しなさい、他の者に見られてもよくありませんからね」

優しい言語を聽いて居る俊子の切なさより、お富は、俊子の心を察して堪らなく

なつた。

「あゝ、妾はもう胸が裂けさうです何も彼も云つて了ひます」

「呀」と俊子は慌てゝ「富、お前妾を……」

「だつて貴婦……」

「覺悟の罪だわ」

「……噫、妾は云ひたい……」

（一四）更けたる夜

更けた秋の夜は寂々として物音一つもきこえない。

何處やらで鳴く虫の音も絶えつ續きつ哀れに細い。

想ひ無い身の心でも、寂しさ心細さに涙催さるゝ此の夜半を、靜子は戀に懊惱み想ひに悶え、衣食の窺乏にまで難まされ、病ある身を寝もやらず、涙に曇る眼を拭

き〳〵しながら、薄暗い洋燈の下で、一枚何錢の寫字をして居るのである。

有るだけのものは悉く奪ひさられて母子二人の生命と賴む金――國衛の兄の一忠から惠まれた僅か數十圓の金、それも最う僅かの殘りとなつては、靜として居喰いする事も出來なくなつた靜子は、詮方無さに新聞廣告にあつた寫字方の募りに應じた。

其の募りに應じた時も、靜子はどれ程辛い愧しい思ひを爲たゞらう。我國第一の音樂家として、一夜の演奏を請はるゝにも、叩頭百拜された身が、僅か一枚何錢の筆寫料を受る爲、低頭平身匍匐して行く事が、如何に悲しく、情なくあつたらう。

「それでも靜子は止むを得なかつた、原稿と原稿用紙は受けとつて、それを持つて歸つて來てからは、食卓にと云つて買つて來た卓を机の代用にして、一心にそれを書き初めた。が、思ふだけの枚數はとうしても書けなかつた、國雄は乳の不足を訴へて、時ともなしに憤がる、靜子自身には病の爲の氣鬱ぎと、胸の痛みや頭腦の痛みに惱まされ、或時は國衛の事のみ想ひつゞけてあらぬ事に筆を辷らし、折角半以

上書いた原稿用紙を揉みくちやにして捨てる事も度々あつた。

此の頃では、それでも少しは手馴れがして來て、幾分か時間短く書き得る樣にはなつたが、まだ一日の豫定額の枚數にはどうしても達しない。それで國雄の寢るのを待つて、夜遲くまで洋燈の下で筆を持つ事にして居るのである。

だが、夜、更け、人、靜まり、寂とした中にたゞ一人、趣味なき筆を紙の上に走らしして居ると、想ふまいとする事まで想ひ出され、考へまいとする事まで考へ出されて、又しても涙を誘ひ出されるのが常である。

靜子は今も、筆を持つた手の胛へ、思はずホロリと落ちた涙の露が、洋燈の灯影に美しく光るを、暫時凝然視つめて居た。

――いつになつたら此の涙が涸れる時があるだらう。人をも世をも怨もうとは思はぬが、妾の身にどんな重い罪があつて、此の切ない、悲しい苦しみをいつまでも續けさせられる事だらう迚も生存甲斐の無い此の身なら、寧そ疾く死んだらば、此の苦痛は嘗めずに濟む……が、自分は今死ぬ事さえもかなはない、自分には大きな

責任がある良人から預つてある國雄がある。國雄を立派な男に育てあげて、我心の此の眞實を、良人に認めて貰つて其の後でなければ死んでも死にきれない。情無くても、此の軀の上に息のある間は、否良人の誤解を解くまでは此の軀の肉を殺ぎ骨を削つても、國無の爲に生存ねばならぬ。

偶と氣がついて急いで筆を走らしかけたが、想ひは又想ひを續けて行く。――だが、良人は、今頃什麼して居らつしやるだらう。無事な、平和な、圓滿な夢を溫かい蒲團の裡に、結んで寢んで居らつしやるだらうか、其の夢の裡へ、我等母子の心が通はないものだらうか。佐久良のお邸でお別れした後、大森の電車停留所で、暫とお顏を視たまゝ言語一つも交はさない、噫、懷しい――

胸は亂れて、靜子は時の過ぐるのも氣がつかない。

傍に寢て居る國雄はいつからともなく苦しさうな息を吐いて居る。

靜子は何氣なく見やつたが、それと氣がついて驚いて傍へ寄つた。

手を當てゝ見ると國雄の額は、熱の爲に火の如になつて居る。

「呀」と靜子は小聲に叫んだ。

（一五）のこし文（二）

秋雨のあとの雲の斷れ間から、午後も四時を過ぎた弱い暑の脚が、高い銀杏の樹の梢に映して、母屋の家の棟に鳥が二つ來て、嗄れた聲で啼いて居る時だつた。

佐久良の邸の玄關前へ自働車が着けられた。

降りた客は平野子爵と俊子とである。

斯と知らせで中將夫婦は急いで出迎へた。

兎も角もと客間へ招じてから双方の間に挨拶が交はされる。

茶よ菓子よと小間使ひ立ち廻つて居る。

「早速ぢやが、國衞は此邸へ歸つて居るのかな」子爵は中將の顏と夫人の顏とを見廻しながら訊ねるのである。

「否、まだ歸りませんぢやが、貴下方と一緒に出たのですか？」中將は不思議さうに答へと共に問ひ返した。

「一緒ぢやない。昨日の朝から國衛は出て居るのぢや」

「然して昨夜も歸らんですか、此邸の方へは顏も視せませんぢやが」と中將の顏には早恐ろしい氣色が見えて居る。

「國衛が昨日の朝出ましたきり、お邸の方へ歸らないと仰しやるのですか、飛んでもない事でございますね、あれに限つて餘處で泊つて來る樣な事は決してない筈でございますが、如何致しましたのでせう」と夫人は心配らしく眉を顰せた。

「それがぢや、一昨日國衛の氣に入らぬ事が些しあつたか知れぬと思ふ事があるので、若し其の爲に此邸へ歸つて居るかも知れぬと思つて昨夜一夜は過したぢやが、今朝になつても、何の便りも無いので、それで此方へ今朝電話をかけさせてみると來て居らんと云ふお答辭ぢや。それから家内中が騷ぎ出して、今此邸へ伺つた次第ぢやが、此家の方へも電話も何もなかつたか」

「然樣、今朝、お邸から、國衛が行つたかと云ふお尋ねであつたさうですが、そんな事とは存じませんものですから、たゞ來て居ない事だけお答へ致しまして、貴下の方からも格別何のお言語も其の際無かつたもんですから、つい其のまゝに何の氣もつかずに過ごして居りましたが、それは什麼も怪しからん事でございますね」と夫人は夫の方へ言語尻を向けた。

「怪しからん奴ぢや、無斷で外泊するとは以ての外ぢや。何處に居るか引き摺つて來て懲さにやならん」

「ア、お義父さん」と俊子は制めて「若しかすると、お朋友の許で引き止められて居らつしやるのか知れませんのですから」

「否、何處に居るとしてもぢや、無斷で外泊するとは許されん事ぢや」

「まあ、待つて貰はにやならん。談話が前後して來たが、其一昨日の事が些とあるので、夫で俺も心配して、昨夜國衛が歸らんと今朝聽いてから氣をつかつて居るのぢやが、俊めは、偶とした、以前何やら關係のあつた立花爭子とか云ふ女の方へ

行つて居るのぢやあるまいかと、這云ひ出したので、實は今其の女の居ると云ふ大森の方へ行てみたのぢや。所が其の女も疾くに何處へやら行つて其處には居ない」

「それは疾くにから居ない事は私どもの方で知つて居りますぢや」

「靜子さんは何處へ行らしつたのでせう」と俊子は懸念さうに云ふ。

「誰かゝ靜子は大森に居ると云ふ葉書をくれたので、探して見たが其の時早何處かへ行つたさうぢや」

俊子は、其の葉書は妾が出しましたと云はふとしたが、其まゝ口を噤んだ。

「それでは其女の許でもあるまい」と子爵は小首を傾げる。

「あの女の許へ重ねて行く如なそんな事はありますまい」と夫人は打ち消す如に云ふ。

「心當りはあるまいか」

「早速知己の許へ電話をかけさせて居る所が分明つたら私が行つて引きずつて來る」中將が鈴を鳴らさうとする途端、

「平野樣の夫人が來らつしやいましてございます」小間使が闕際に手を突いた。

（一六）のこし文（三）

子爵の夫人康子は、佐久良夫婦との挨拶が濟むと、懷から出した一通の手紙を、子爵の前へ出した。

「呀、國衛からのぢや」と子爵は狼狽た如に云ふ。

「然樣でございます。それで急いで持つて參りましたのでございます」

「國衛から？……何と云ふて寄越したか、御覽下さい」と中將は膝を進めた。

子爵は封筒の中から罫洋紙にペンの走り書きしたのを引き出した。

「突然に邸を出で候事故定めて御驚き遊ばされし事と存じ候、一度戀に破れしもの の心の創痍は容易癒えるものには無之癒えぬ創痍に懊惱むものは自然他に對する熱愛、或は情熱等の起るものに無之、其の爲に俊子どのとの夫婦の間も、誠の夫

婦としての愛情が生せず俊子どのに不滿の念を懷かせ、其の結果が俊子どのに人の妻としての道を踏み外させる如な事に相成りたる次第に候。罪は俊子どのにあるにあらずして、原は私の罪にあるのに御座候。此の際、多く云ふは、あまり好ましき事にもあらず、何事も云はず、聞かずの方が宜しくと存じ、邸を出る時にも何事も申し上げず、又、承はりもせず、飛び出して了ひ申し候……』

『怪しからん奴ぢや』と中將は怒りの拳を握り固める。

『マア、貴夫の如にさう仰しやつても』と嘉久子は宥める。

子爵は讀み續けた。

『私は最う、此の東京に居る事が、實に辛く相成り申候。見るもの聞くもの總てが不快に感はれてならなくなり申し候。依て豫ての宿志もあり候事故、此の際、支那の或地より西藏へ這入り、彼の地の、古來開かれざる秘密の寶庫を探り度存じ、先づ支那の或地を志し只今出帆致し申候……』

『呀、お父樣、國衛樣は最う東京には居らつしやらないんですねえ』と俊子は思はす父の持つ手紙に手をかけた。

『最う出帆したのぢや』と子爵。

『妾、什麼致しませう』と俊子は泣き伏す。

『什麼かする事はできませんか』と康子はおろ〳〵する。

『益々怪しからん』と中將は呻る如に云ふ。

『まあ、待ちなさい』と子爵は手を顫はしながら、

『此の手紙の御手に這入り候時分は既に海上の人となり居り候つゝ吳々をも願ひ致し度は警察其の他へ搜索方等の御手續きをなさる事は御見合せ願ひ度き義に候私の名譽、私の心事、それをお思ひ下さるならば何卒此のまゝ御捨置きが此の上もなき御情に御座候。御恩に報る時もなく、かゝる我儘を致し候事、甚だ心苦しくは候へど、これも成り行きにて致し方なしと御赦しの程願ひ上候。幸に、志望を達し、生命を無事に所持し、歸り來る時あらば、其の際身を粉に碎き候て御恩の萬分一に酬い申すべく候、萬一不幸にして、異域の鬼となり候時は、不孝も

それまでと御思召しの上、總てをお赦し下さる樣願ひ上候。實家の方へは何も申しらす候故、おついでのあり候節、此の事一寸お知らせ置の程願ひ申上候。終りに皆樣のお身に祝福ある樣、祈り上申候』

『貴夫、何とかなすつて下さい。國衛が此のまゝ歸らなかつたら、妾等は何と云つて中將夫婦の衆に顏が合はせませう。どうぞ御思案遊ばして下さい』と康子は子爵の膝へ膝をつきつける。

『お父樣、國衛樣がそんな西藏の如な危險な所へおいで遊ばして、若しもの事がありましたら、妾は何と致しませう。何卒、何卒、直にお歸り遊ばす樣、何とかしてお呼び歸しなすつて下さい、お願ひ致します』と俊子も父の膝へとりついて居る。

『こんな事になるのもお前からぢや』と子爵は兩腕を拱んで『中將御夫婦にも云ひ譯が無い』と太息をつく。

中將夫婦は顏見合はして居たが、

『嘘、親の權利で我子を殺す事になりましたわねえ』と嘉久子は眼を拭いた。

言語が斷れて、俊子の欷歔く聲のみが耳にたつて居る。

《一七》海上（一）

×日神戸港を發した汽船春陽丸は、門司に寄港して、それより上海へ直航するのである。

總噸數三千八百十餘噸の、最新造船は今や玄海の灘を威容堂々として波を蹴つて進んで居る。

秋の澄みきつた空は碧瑠璃に　拭つて磨ぎをかけた如である。それにかゝつた月一輪、冴えに冴えて明鏡の如。

航海中の無聊を慰める爲、乘組員のお自慢で演じられた餘興も今しがた濟んだ。

乘客は己が室へ歸るものもあれば、月を視やうと甲板へ出るものもある。

其の以前より甲板に出て、語る對人も求めずたゞ一人、澄みきつた月を眺めて居

る紳士がある。背廣服の胸には細い金鎖が炫いて、眼だゝぬながら寸分の隙もない服裝に、先づ人を畏敬さす品位がある。

云ふまでも無い。それは平野國衛。

擧動は何處までも快活にそして居て、顏の何處やらに沈んだ色の見えるのは、心裡に想ひのあるからだ。

喞えて居た口金の煙草を投げ出して其處らにあつた椅子を引き寄せて軀を凭した。

希望も快樂もない、養家に飼犬の如に養はれて、破れた戀の創痍に惱みながら兎も角も妻として居る俊子の不品行を耳にして、靖として居る事はどうしても出來なかつた。國衛は不滿があつた。不平もあつた。懊惱もあつた然して自分の身の不幸を嘆ずる悲哀もあつた。

——生存しても死んでも何方でも好い恩や義理やそんなものに縛られて、自己の意志の自由は悉く奪はれた上、妻の不貞を責める事すらも出來ない身で生存して耻を

忍んで居るよりは自分の盡すべき學界の犧牲となるのがどれ程潔いか知れぬ、若し幸にして我國家の上に僅少でも益する樣な事があるなら、それに此の身を捨てた方がどれ程快いか分らない、生ても死んでもそれは天の命に委して、自分は豫て志望の西藏內地を探つて來やう、そして、運よく行けば印度から進んで亞弗利加の內地深く這入つて生命の續く限り探り得らるゝだけの事を探險してみやう。どうせ一度は果てる生命なら、こんな意氣地の無い、光明の無い、無味で平凡で不快な日を送つて果るより、男としての死に甲斐のある方面へ出て死んで來る、それが何よりだ——。

國衛が邸を出る時の決心は這だつたのである。

が、今、我本土を離れて、水、天に接して眼を遮るものも無い大海の上、冴えた月に對しての感慨は無量である。

——噫、憎い靜子は今頃どうして居るだらう。可愛い國雄はどうして居るだらう——。

國衛は靜子の不貞を憎み憤りながら心の底から彼女を忘れる事は出來なかつた。それは國雄と云ふ憂の鎖もあつたからではあるが、眞から愛し愛された昔日の事がどうしても心の裡から消えて了はない。捨てた女だ、忘れやう忘れやうと、努めながらに執着は放れなかつた。

――憎い、惡い、彼の臟腑の腐つた靜子の顏を視やうとは思はぬが、せめて國雄にだけは一眼會つて來たかつた、今日日本の地を離れたら再び歸つて來るやら來られないやら知れぬ我生命だ、親子一生の生別に一眼だけ會つてみたかつた。心に殘る。懷しい氣がする。が、あゝそれも未練だ――。

國衛は人知れぬ溜息を吐いた。

偶と氣がつくと、甲板も下も、俄に人が走つて居る。乘り組員の喚く聲が耳に入る――。

國衛は起ちあがつた。

今まで靜であつた波浪が見る〳〵躍り出して居る。

何處からともなく轟々と云ふ音がする。

怪しい雲が出て、それが矢を射る如に飛んで居た。

（一八）海上（三）

「どうも大變な暴風が來ました」と、事務長が走りながら誰やらに云ふのが聞こえた。

船は大きく搖れだした。

斷れ〴〵に飛んで居た雲が、いつの間にやら重り〳〵つて、月を包んでしまつて居る。

帆綱は颯々と唸りを立てゝ、煙筒から吐き出す黑煙が、甲板の上へ叩きつけられる如になるかと思ふと、グルグルと捲き上げられて吹き飛んで行く。

刻一刻、海上が暗くなつて、波浪が荒れ狂ふ。

甲板の人は皆船室へ逃げこんで、影もない。風は愈々強くなつて來た。
黒い空が漸々低く垂れて來て、浪も、船も、一包みにと蔽ひかゝつてくる。
白馬が荒れ狂ふて其の暗い空めがけて駈け登らうとする如に、波頭の白いのが重なり重なつて、高く空を打つ。
四千に近い噸數を有する春陽丸も、吹きつける風、暴れに荒れる波浪、それに飜弄されて、今は一片の柳葉に異らない。
轟！と凄じい音と共に山の如き波浪は船首から一呑と襲ひかゝつた。
一個の短艇は苦もなく浚はれて、拗つた紙片の飛ぶ如に波間に消える。
喚く聲、叫ぶ聲が、船中の何處やらから聞こえる。
滔天の怒潮は蓼々洶々として凄じい音をたてる。
空の雲は眞黒く重く嵩なつて、それが躍り上る波頭を掠めて飛んで來ては飛んで行く。冥濛たる海上、四面暗憺として凄まじく怒號する波浪を突き切り、乘り切り春陽丸は進んで居る。

其の船首に打ちつける怒濤は無數の白龍を冲天に跳躍せる。
右に傾き、左に搖られ、忽にして九天の上にあるかと思へば、忽にして奈落の
へ押しつけられ、流石の春陽丸も巨大の體軀に自由はない。
轟と音して、山をとつて投げつけた如な波浪が船の上へ覆ひかゝつた瞬間恐しい
音響と動搖とが一時に起つた。
「難破だ！」と叫ぶ悲痛の聲。

＊　＊　＊

風納まり、波は靜まつて、碧空高く金銀の星煌めいて、潮流緩く、波浪の音もな
い海上を、王者の如く進航して居るは、香港行きの汽船、六千餘噸の其の阿波丸で
ある。
或る一室には今しがた難波船から救助した遭難者七名が、まだ人事不省で横はつ
て居るのである。

船長と醫師とは其傍に立つて居た。

「皆大丈夫ですか」船長は醫師の顏を氣遣はしげに視る。

「其の一人はどうかと思ひますがねえ」と醫師は腕を拱んだまゝ頤で指した。

「それ一人だけは駄目ですか……他は如何です？」

「他は好いでせう。大丈夫の積りですがね、只今では」

「どうかお骨折りで救助たいもんですね、折角これまでにして來たのですから」

「六人の者はこれで少し時間が經てば追々元氣が出るでせう」

「この一人だけ、ど什麼しても不可ませんかねえ」

「餘程甚く肋骨を打つて居るもんですから、それに、其後頭部の打撲が致命傷ですし迚も助る事はありません」

「氣の毒ですねえ」

二人は暗然として居る。

「汝れ靜子、汝れ……」と横はつて居る一人が譫言と云つた。

船長と醫師とは顏視合はした。

（一九）闇

（一）

國雄が發熱した其の翌朝は顯著しく熱が下降した。

靜子に徹夜で看護した甲斐のあつたのを喜んだ。

か、それは一時の喜びに過ぎなかつた。國雄の小さな體軀が燃えるかと思ふ程の激しい熱が再び發して來たのは午後の三時過ぎであつた。

靜子は狼狽へて近隣の醫師の診察を請ふた。

醫師は首を傾けた。

「病氣は何でございませう。若しや惡い病氣ではありませんでせうか」靜子は蒼い顏して訊ねた。

「まだ何ともお答へする事はできませんが、病氣の質のあまり好くない事だけは申

して置きます。これは尾張方面でよくある、一種の風土病とも云ふ、颶風當と云ふのに酷似て居ます。突然發熱して、僅か一二時間の手當の遲れとなるとどうも助らない、實に恐ろしい病氣です。此東京にはあまり無い病氣なのですが、私は颶風病と云ふのぢやないかと思ひます。出來るだけのお手當はしますから、マアお大切になさいまし」

「では助らないのでせうか」靜子はおろおろ聲になつた。

「否、まだ其れまで申し上げる程では無いと思ひます。然し颶風病と云ふのは、最初發熱してから三日間經過すれば大抵生命を取りとめるさうですが、激しいのは先づ四十八時間內外位で死んで了ひます。坊樣の熱も三十九度八と云ふ大分甚いのですから、御要心なさいまし」

靜子はそれを聽いて自分の生命が今にも斷れて了ひさうな氣がした。國雄を抱いて歸つて、途中で買つて來た氷で一生懸命になつて頭を冷してやつた。

國雄は熱の爲に精神を失なつて居るのか、細い聲を出して泣いて居るかと思ふと

スヤスヤ眠つて、不意に可笑しさうに聲を出して笑ふ事もある。然して喟々と吐く息が傍に見て居ても苦しさう。

靜子は、醫師の親切で貸してくれた檢溫器で國雄の體溫を見たり、氷を取り替たりして、一分の間も傍を離れない。心裡では國雄の全快を一心に神に祈りながら。

「オイ、居るのか」と、無遠慮に這入つて來たのは兄の進であつた。

靜子は洋燈を點けて、國雄の藥を猪口と一緒に持つて、起とうとして居る時だつた。

「呀」

「何が呀だ」と云ひつゝ氷囊を頭に載せて居る國雄を見て「呀、こちらが呀だ。どこか惡いのかい」

「靜にして下さい。大變に惡いのですから」と靜子は眉を顰せながら云つた。

「什麼したのだ」と、進は俄は小聲になつて、首を笑き出して訊きながら胡座になる。

「昨夜の夜半から大變な熱が出まして、どうも好くありませんのです」靜子は兄の進が出て往つたまゝで歸つて來ぬのを悅びながら、こんな場合に自分一人で居るのが如何にも心細くてならなかつた。其所へ突然兄が出て來たので、何となく心嬉しい氣にもなつて、何故來たかと咎める氣にもなれなかつたのである。

「そりや不可い。越田君を早速招んで診て貰はふ」

「否、それは廢して下さい」

「何故？」

「何故でもありません。彼の人は妾は嫌ひです」

「お前が嫌ひでも、子供の病氣を捨てゝ置けない。近隣にある如な筍先生では駄目だからね」

「否、越田さんなんかには最う闕も跨いで貰ひません」

「大變御意を損じたな。と云ひつゝ進は國雄の小さい手を密と握つて見て。

「こりや大變な熱ぢやないか」

「どうか詮樣の無いもんでせうか」靜子は吐息と一緒に云つた。

「然さナ」と進は國雄の顏を洋燈の灯影に覗いて「呀、大變だ！」

「エッ？」

「大變だ。疾く、疾く、醫師、醫師だ」

《二〇》闇

（二）

醫考は迎へられた。

流石の進も顏の色を變へて心配さうに國雄の顏を覗いて居る。

靜子は自分の生命が今にも絕れて了ふかの如に、蒼白になつた兩頰に涙を傳はして居る。

醫師は國雄の小さい胸部へ二度まで注射をした。そして暫時の間脈搏を診て居たが、例も癖にする小首を傾げた。

「誠にお氣の毒ではありますが、どうも最う此の上、私の手の盡しやうがありません何卒最一人何誰かお立會をして戴いて、然して相談してみては如何でせう。私は最うお諦めを願ふより詮方が無いとは思ひますけど、若し他の方が其麽お考へをお有ちなさらないとも限りません。何誰にでも來て戴くと後でお心殘りが無くて宜からうと思ひますがね」

「醫師を最一人聘べと仰しやるのですね」と進は靜子と顏を見合はした。

危篤と知つた靜子は、最前より最一人醫師をと氣がついて居たのだ。だが、靜子の懷中には他に醫師を最一人迎へて、診察を請ふだけの金が無かつた。家の內中を見廻しても、賣つて金に代える如な代物は何も無い、靜子は胸を抱いて居たのだ。

それでは早速、と靜子の云はぬのを見てとつた進は靜子の袖を引いた。

「オイ、越田を招ばふぢやないか」と微聲、

「嫌です、あんな人」と靜子は吐き出した如に云ふ。

「そりや嫌かも知れないが、國雄の生命には代へられぬよ。他の人を招ぶと云つて

も、今ぢや……その何だらう。ねえ。あの越田なら手腕は確だ。國雄の生命はお前の生命よりも大切ぢやないか。嫌だらうが、今度だけ堪忍をして、ね、然爲やうぢやないか。一刻遲れても取り返しがつかなくなる。お前が强情を通して、若し助かる筈の國雄が死にでもしたらお前は國衛君に何と云つて云ひ譯をする。こんな場合ぢや、强情を云つて居る時ぢやない。俺に委して置け」

「だげど」と靜子は苦しさうに涙を拭く。

「宜いから、委して置け。お前の生命より國雄の生命の方が大切だ」と進は狼狽と駈け出した。

靜子はそれを止める事も出來なかつた。成る程、今の場合、自分の生命より國雄の生命の方が大切である。今國雄を殺して了つては、今後國衛に會つても何とも云ひ樣が無い。若し惡く取られて、此身の生活に邪魔になるので粗末な育て方をして居た爲に病氣なんかを發して死んだのだ、と云はれても辯解の爲樣が無い。辛くても情無くても、忌はしくても詮方が無い。自分は何を忍んでも國雄の生命を助けね

ばならぬ……然りとてあの越田に再び頭を下げねばならぬとは何と云ふ情ない事だらう。思ふと熱い涙か知らず識らず溢れて出る。だけど、これも國雄の爲だ。と凝然、堪へた。

國雄は微かに息を吐いて居る。

注射の藥の香が室の内に漂ふて、滅入る心を一層妙な暗い方へと誘つて行く。

嚏て進が息を喘ませながら歸つて來た。

「今自働電話をかけたが、越田君は早速自働車で來て呉れるよ」と、額の汗を拭いた。

「來らつしやいますか」と醫師は責任の輕くなるのを喜ぶ如な顏をした。

靜子は國雄の生命が取り止めたい一心で、越田を厭ひながら、一時も疾く來て呉れゝば好いと心に願つた。が其の一方には越田が先達ての事を憤はつて、進が招ぶと云つても、拒絶を爲やしないだらうかと云ふ案じもあつた。けれども、越田は早速來ると云ふ兄の言語に、尠からぬ頼しさも感じられた。

不安な、不安な時間が二十分三十分と進んだ。

唸る如な警笛の音が寂な夜の巷に聞こえたと思ふと自働車が門前に止まつたらしい。

入口の格子が啓いた。

靜子は身を引き締められた如な氣になつた。

進は早速飛んで出た。

一言二言低聲で話しながら越田が這入つて來た。

醫師と越田は簡短な初對面の挨拶をして、越田は國雄の容態を聽きとつた。

越田は直に國雄を見た。

咳一つするものも無い寂とした室の中、越田の眼は、電の如に靜子の顏へ注がれた。

（二一）闇

（三）

越田の眼配せに進は起つた。

越田は其れと一緒に起つて、二人は二階へ昇つて往つた。

靜子はそれを見ながら、越田に何を問ふ氣にもなれなかつた。

醫師は怪訝な顔をして居たが、これも默つたまゝ國雄の體温を檢べて居る。

間もなく越田は降りて來て、小さな鞄から注射の器具を取り出した。

「靜子、些と昇て貰ひたいがね」進は二階の降口から招んだ。

靜子は國雄を氣遣ひながら、詮方なしに二階へ昇つた。

「お前に相談しなきやあならん」と進は暗い室に胡坐と組んだ。

靜子は怖いものゝ傍へ寄つた如にして、胸を抱いて坐つた。

「お前はあの國雄の生命を何してゝも取り止めたいと思ふかね」進の聲は小さいが

太い。

「そりや云ふまでも無いぢやありませんか」と靜子は一氣に答える。

「否、什麼してゝもとは訊くのだ」

「什麼してゝもとは？」

「お前の生命を捨てゝも、國雄の生命の助けたいと思ふか、それとも、止むを得なければ國雄の生命は失くしても、お前は生存て居りたいと思ふか、と、それを訊くのだ」

「國雄を殺して妾しは生存て居りたくはありません。國雄が死にますなら妾も一緒に死んでしまひます」

「國雄の生命をお前の生命で代る事が出來たらお前は什麼する」

「妾の生命で國雄の生命を助ける事が出來ますなら、妾は此の生命を投げ出しても構ひません」

「屹度然か」

「エ、、それで妾は國衛さんに對しても、心盡しの甲斐が見えると思ひます」
「可、それなら俺も安心だ。實は今越田君が、國雄の生命は必然救助て見せると云ふのだ」
「越田さんが……？……國雄は助かりますか」
「必然救助けると云ふのだ。が、それには條件がつくのだ」
「條件？、什麼條件でも……」
「お前は承諾するか」
「國雄が助かる事なら、どんな事でも致します」
「然なけりやならん。國雄を今殺して了つては、今迄お前が苦心に苦心をした事が皆水の泡になつて、國衛君に對しても申し譯が無くなるだらう。國雄の爲にお前は此際犧牲になる事だ」
靜子は默頭いた。
「越田君は、自分の身にかへても國雄を救助ると云ふのだ。其の代りお前の身を貰ひたいと云ふのだ」

「エ？、妾の身を？」
「お前に結婚する事を承諾して貰ひたいと云ふのだ。お前が越田君と結婚する事を承諾してくれるなら、國雄の生命は、假令、どんな方法を講じても必ず救助る。が若し、お前がそれを承諾しないと云ふなら、何等の義務もないのに、然程力を盡す事もないのだから國雄の生命は今までの醫師に委して成り行きにして放て置くと云ふのだ。越田君は、つまりお前の身と、國雄の生命と交換して貰ひたいと這云ふのだ」
「……妾、そんな結婚なんかはどうしても出來ません」
「それでは國雄は死んでしまつても關はないと云ふのかね」
「關はないと云ふのでありません。だけど、妾は……」
「今、お前はどんな事をしても好いから國雄を救助けて欲しいと云つたちやないか什麼條件にでも應じるから國雄を救助けたいと云つたちやないか」

「それは云ひましたけど、結婚する事だけは妾は出來ません」
「それぢや國雄を此のまゝ見殺しにするのか」
「見殺しにする事は出來ません。何卒助かる見込のあるものなら、そんな事を云はないで救助てやつて下さる樣貴兄から越田さんに賴んで下さい。他の事なら什麼事でも致します。懇請ですから、お願ひして下さい」
「それは不可ん」

（二二）闇　（四）

進は低いながら聲に力を入れて、
「人間と云ふ奴は報酬が無けりや働くもんぢやないよ。お前が長い間の病氣を一錢の金も取らずに診察したり投藥したりしたのは、越田君の方に、お前と結婚したいと云ふ希望があつたからだ。越田君があれだけの親切を盡してくれて居たのに、お

前が情なく結婚を拒絶したもんだから、それで越田君も先日は一時腹を立てたので普通なら今夜も此方からこんな時分に今診察に來いと云つたつて、おいそれと來てくれるもんぢやない。それを先日の事を根にも持たないで、早速飛んで來てくれるのは餘程の親切と同情とが無けりや出來るもんぢやない。金や品物で交換する事の出來ない人の親切に酬るのには、矢張り心をもつて報すより途は無からう……殊に今の場合は人間の生命を失くするか取り止めやうかと云ふ場合だ。お前の我を通すと云へば國雄は見殺しになるのだ。國雄を救助たいと思へばお前が我を折つて、越田君と結婚する事を承諾するのだ。俺は無理に、お前にどちらを執れと勸めはしないが、取り返しの出來ない考へ違ひを爲ない樣と、それだけを十分に注意するのだよ」

靜子は途方に暮れた。越田が自分に對して內心は兎も角も、出來るだけの親切を盡して居た事も知つて居る。今、自分が結婚を拒絕すれば、其の報復的に國雄を救助ない事も判明つて居る。だが、國雄を救助けたい爲に越田と結婚しては、自分が

今まで國衛に立て徹した心の操は一時に破れて了ふ。國衛から受けて居る疑ひをいつ迄も融く事が出來ないのみならず、此の身は終生不貞の女となつてしまはねばならぬ。と云つて、今我身の貞操を守らうとすると國雄を生存す事はできない、國雄を殺して自分のみ生存て居ては、假令貞操を守つて居ても他日國衛に會つた時何と云て云ひ譯をするか、若しも、自分一人の生活の邪魔になつたから、子供の養生すら碌に爲せなかつたのだらうと云はれても、云ひ解く言語はない。噫、どうしたら好いだらう。と靜子は身も心も悶えて居る。

「お前はどちを執る事に決心するね」と進に蛇の物を卷いて締めつける如に、

「いつ迄も時間を費す事の出來ない今の場合だぜ、國雄を救助けるなら一分も疾く手當をして貰はなきやならん。若し結婚を拒絶するなら、越田君は早く答辭を聞かして歸つて貰はなきや、俺が越田君に辯解が無い。どちらを取つて何方を捨つるのだ」

靜子は泣くより外に言語は出ない。

「愚圖々々して居て、若し國雄の手當が遲くなつてしまつたら什麼するのだ」

靜子は絶對絶命になつた。

「何卒、何卒、國雄を助助てやつて下さいまし」

「それぢや越田君と結婚するのか」

「……」靜子は泣き伏した。

「必ず間違ひ無く結婚するんだな。諾、それでは俺から越田君に然云つて國雄の生命を助けて貰はふ、國雄さえ助かれば、お前は國衛君に對しても立派に義務が立つ假令越田君の夫人となつて居ても、お前の貞操は立派に世間から認められる。それのみならずお前の將來は非常な幸福だ。俺も暢氣に酒が美味く飲まして貰へるよ」と笑ひを遺して進は階下へ降りた。

一人殘つた靜子は泣き伏したまゝ前後正體もない。

――自分は何と云ふ不運な身の上だらう。死んでも別離ないと決心し、固く約束して夫婦となつた良人には、義理で別離なければならぬ事になり、現在の良人に他

の女との結婚を勸めて、そして自分はあらぬ疑ひを良人から受みて、犬畜生の如に罵しられ、怨まれ憎まれて、それを辯解事さえ出來なんだ、だけど何日かは此の心の眞實を知つて貰ふ時もあるだらうと、そればかりを樂しみにして、悲しい苦しい日を送つて今まで堪へ忍んで來て居たのに今では最も其の樂しみさえ捨てねばならぬ身となつた。然して心にも無い男と結婚をして、此の身の一生を破壞して捨てゝ了はねばならぬのである。こんな事なら生存るよりも國雄の生命に代つて死んだ方がどれ程好いか判らない——。

と、悶える靜子の胸に偶と或るものが閃めいた。

死だ！。と靜子は心に叫んだ。越田との結婚を一時承諾して置いて、國雄の生命を無事に取り止めてから、此の身は潔く死んで了はう。然すれば此の心の操も破らずに濟む！。

靜子の決心は固まつた。

階下では國雄の細い聲がした。

靜子は我を忘れて駈け降りた。

（二三）闇　（五）

其の夜は徹夜をして、其の翌日から四日間と云ふもの越田は殆ど國雄の傍に附ききりで診療に從事した。

國雄は一日一日と快方に向つた。

靜子は越田の親切な診療を感謝せずには居られなかつた。

靜子が衷心から感謝する言語を聽いて越田は其の度毎に滿足らしい笑を浮めて、

「こりや僕の職務ですよ」と云つた。

國雄は一週間の後には全く快復した。

「最う大丈夫です。これで病後の食物だけ注意すれば好いのです」と越田に得意氣に云つた。

「國雄の生命は貴下から貰つたのです」と進は喜んだ。

靜子も國雄の元氣な笑ひ顔を視ると、

「貴郎のお蔭ですわ」と越田に眞から嬉しい笑顔を視せるのである。

「此の恩を忘れちや人間ぢやあ無いよ」と進は靜子に繰返して云つた。

其の度毎に靜子は胸へ釘を打たれる如に感じた。

國雄が漸々元氣を增してくるのと反比例に、靜子の心は漸々暗い方へと陷ちて行く。

國雄の全快祝ひをするのだとか何とか云つて、進が越田と一緒に出て往つた後で靜子は一人深い思ひに沈んだ。

越田が病院の方を代診や書生に委せ限りにして、夜となく晝となく自分の家へ出て來て居るのは、最う此の身と夫婦にでもなつた氣で居るのだらう。今までは國雄の病氣があつたので結婚の談も持ち出さなかつたが、國雄が此の通り全快すれば何時結婚を延るか知れぬ。迫られた時は今度は云ひ遁れる事は出來ない。義理に絡まれて居る此の身は否應なしにそれを承諾せねばならぬ。承諾すれば此の身の眞操は破れて了ふのである。貞操を破つては良人から受けて居る疑ひを其のまゝ事實として了つて、此の身は終生……否、死んでの後までも、良人の怨恨と憎怨とを融く事はできない。自分はそれが生命を奪らるゝよりも悲しいのである。良人の口からたゞ一言、お前の心情はよく了解つた、許してやる、とそれだけ云つて貰へば此の身は假令什麼なつても靜はないのであるが、それまでは什麼苦しい思ひをしても、假令生命を捨てゝも、今まで立て徹して來た心の操を破りたくない。と云つて、越田から結婚を迫られたら、それを拒絶する事はできない。噫、自分は仍且一度決心した通り、最う生命を捨てるより他に執る途はない。いつまで生存ても何の樂みもない此の生命を捨てゝ、死んだ後でも、良人から此の心情を認めたと云つて貰へばそれで本望である。潔く生命を捨てやう……だが、自分が死んだら此の國雄は什麼なるだらう、まだ東西さへよく分らぬ此の幼いものを一人遺して、死んで行く此の身は今の此の苦痛を逃れる事が出來るのであるが、遺される國雄は什麼悲慘な目に會

ふだらう？。父親はあつても生別れの言も云つて貰へない間ではあるし、此の母と
は死別れの最う永久に相見る事は出來ないのだし、たつた一人、肉身の叔父はあり
ながら、あの通り酒の爲に身も心も奪はれて、人の道も愛も情も知らない人である
し、他に頼る所のない孤兒となつて、どんな憂い辛い目に遭ふかも知れぬ。それを
想ふと死にたくはない。此の兒の爲に生存て居りたい。だけど、生存て居ては死ぬ
より幸い思ひを爲なけりやならぬ。良人から何日までも女で無し、犬畜生と罵られ
憎まれなきやならない。嗚呼、こんな事なら國雄が寧そ病氣で死んでくれた方がよ
かつたか知れぬ……と國雄の顔を覗いたが、
「あゝ、おッ母様は濟まない事を思つたわねえ。勘忍して頂戴よ。國雄さんを死な
してどうなるもんかねえ」と國雄を緊と抱きしめた。
國雄は乳を探して泣きだした。
靜子は直に乳を啣ましたが、病後の食慾の進んで居る國雄には靜子の枯れた乳で
滿足は出來ない。國雄は憤かり出した。

憤かつて居る國雄の顔を凝然視て居た靜子は潛々と涙を落した。
假令生存て居ても病身な我身で十分國雄を養育する事は覺束なし、死ねば猶更の
事國雄に憂き目を見せるは知れきつて居る。どちらにしても薄い親子の緣だ。寧そ
國雄を捨てゝ自分も生命を捨てやう。
靜子は國雄を抱いて家外へ出た。
老けた秋の夜の冷々した風が膚に泌みこむ如に觸る。靜子はまだ單衣を被て居た
のである。

（二四）闇　（六）

若し進等に出會つてはならないと思つたので靜子は成るだけ暗い方、暗い方と歩
いた。
四つ角を右に曲ると向ふの時計店の屋根看板の大時計が、電燈に照らされて十二

時を十分過ぎた所を指て居る。

靜子は冷々する夜風を國雄にあてさせまいとして、両袖で緊と包む如に抱いて居る。

廣い通りへ出ると、終車の印を出した電車が非常な速力で來た。

靜子はそれに乘る意志もなかつたが停留場の所に些と立停まつて居ると、來た電車も其處で停まつた。

車掌臺から視下して居た車掌は、靜子が乘りさうにして居て乘車せぬのに、自棄氣味な舌打して手荒く信號綱を引いた。

電車は走り出した。

後は寂として廣い往來に靜子より外に人影は無い。

國雄は又、乳汁を求めて憤がつて居る。

靜子は立ち停まつて乳房を啣ました。が、國雄は零時すると、乳汁の出ない乳房を吐き出して憤がるのである。

「詮樣が無いわねえ」と靜子は吐息と一緒に情無さゝうに云つて、國雄を搖ぶりながらとぼ〳〵と歩行いて居る。

さしも雜沓の巷も、更けに更け行く秋の夜の何處に物音もきこえない。寂しさは身に滲みこむ如である。

靜子は譯も無う涙が流れた。自分の立ち廻る所には何處にも暖い風が吹いて居る所は無い。天も地も、此の身ばかりには平和も幸福も與へてくれないのであると思ふと、云ひ知れぬ悲しさが胸に迫つた。

泣き通す國雄を抱きしめて宥めたり慰したり、綾したりしながら、自分も泣きながらに何處を的ともなく足の向くに委して歩いた。

とある角では立番の巡査に怪しみの角燈を差し向けられた事もあつた。或家の軒では犬に吠えられた事もあつた。

何處を什麽歩いて何處へ來たか靜子はそんな事を考へる餘地はない。何處かに國雄を捨て置いて、自分は死ねば可いのである、が、其の場所が無い、國雄を捨てる

場所と、自分の生命を捨てる場所とを探し求めて、時の經つのも知らずに歩いたのである。

Yの字形になつた辻に立つて居た靜子は、左りの方の大きな邸宅のある方へ氣も無しに足を運んだ。

長い間を迂路々々して、歩行疲れた靜子は、大きな門の前に寄つて、喟然息をした。

何心なく視上げる門標に「子爵、平野」と記されてあるのが門燈の淡い光りに朧に讀まれた。

靜子はハッとして飛び退いた。が、再び寄つて視る、門標の文字はそれに相違ない。

靜子の眼からは新しい熱い涙が潸々と落ちた。

噫、良人は、此の門の内に温い圓な夢を結んで居らつしやるのである。情と義理とに引き離された妻子は今を限りの生命を捨てやうとして、此の皮更けを喪家の狗の如にさまよひ歩いて居るのである。靜子の胸は張り裂けさうになつた。堪えに堪えても泣き聲が漏れる。

國雄も泣いて居る。

其の泣き聲が夢になと良人のお耳には入らないものか、お耳に入ればそれを此の世のお名殘として生命を果します。死んだ後でも妾の心の眞實が知れました際、許てやると一言だけ云つて下さい。それで妾は滿足致します。と靜子は涙の片手で門の方を伏し拜んだ。

國雄は一層聲を立てゝ泣く。

靜子は乳房をふくめたり、搖ぶつたりしても、國雄はたゞ乳汁を求めて泣き叫ぶのである。

「そんなに泣かないでおくれ、お前に泣かれると阿母樣は餘計、此の骨々を削られる如ですよ……と云ふものゝ可愛想にねえ。宵に牛乳を飲げたなり、妾の出ないお乳をみ嘲んで居るんですものねえ……だけど最少堪忍して頂戴よ。此のお邸にはお

前のお父様が居らつしやるのです。此處へ意らず識らず出て來たのは何かのお指圖か知れない、お前を此處へ捨てゝ置いたら、自然お邸の人の目にとまつて、拾はれたらお父様のお目にもかゝれませう、然したら豈夫お父様もお捨て置きはなさるまい、却つてお前の幸福となるかも知れません。此處へ知らずに來たのを幸に、お前を此處へ捨てませう。捨てる此の阿母様の辛い苦しい心を察して、必ず酷いと怨まない様にして頂戴よ」靜子は門の扉の傍へ國雄を置かうとした。

國雄は消魂しく泣く。

「誰がよ、誰がよ」と狼狽て懐きしめて「噫、親子の別れとなるんだもの、せめて此の乳汁を十分に飲まして進げたい」と自分の手で乳房を絞つてみても依然出ない

「情無い」と靜子は血を吐く如に云つて齒を喰ひしばつた。

泣く國雄を搖ぶりながら、門の前を放れて向ひ側の小さな門の前を視ると、今しがた配達したらしい牛乳の瓶が函に差しこんである。

靜子は夢中でそれに手をかけた。

「コン畜生ッ、泥棒め」鐵の如な拳は續けさまに靜子の頭上に落ちた。

「呀」と靜子は打ち倒れた。

（二五）闇　（七）

男は倒れた靜子を蹴り飛ばした。

國雄は驚いて、火がついた如に泣き叫ぶ。

靜子は倒れたまゝで國雄を緊と抱きしめて居る。

「泥棒め、警察へ渡してやるんだ。來やあがれ」と、靜子の肩を掴んで引く。

「妾は、妾は、決して、そ、そんな者ぢやございません」と靜子は息も絶々に、涙と一緒に云つた。

「何を吐かしやがるんだ。そんな者ぢやございませんが聽いて呆れらあ。牛乳を盜もうと爲やがつて。此の節毎朝の如に牛乳を盜んで歩きやがるのは汝だらう。汝に

相違無いのだ。入監んでやるから來やあがれ」

「否、妾は眞實は……」

「愚圖々々吐したつて駄目だい。現場を押へたんだから文句は聽かねえや、來せやがれ」

靜子は倒れたまゝに引き摺られた。

國雄は絶え入る如に泣く。

「どうぞ、あゝ、許して下さい。妾は、妾は、眞實」と身を悶搔く。

「强情な奴だ。汝は」と握り固めた拳が又振りあげられた。

「待てッ」と背後から其の手を掴んだ者がある。

「呀」と男は振り向いて「旦那ですか、恰度好い所です」

「什麽したのか」警官は靜子を覗いた。

「ねえ旦那、豫て警察の方へもお屆けがしてある牛乳の泥棒です。今、私が此處へ牛乳を置いて、其の横町へ配つて歸つてみると、此奴が此の牛乳を盜まうとしてやがるんです。突如取つ捉まへて毆……否、その警察へ引つ張つて行かうとしても、强情を張つて動きやがらんのです。此の通り土に坐りこみやがつて動かないもんですから、その……」

「お前は牛乳屋か」

「エ、、精乳舍の配達人ですよ」

「此の女は物盜の現行犯だな。諾、本官が受けとつた。そんなに毎日牛乳を盜んで居るのか」

「エ、毎朝です。此の近處では何處かで毎朝盜られるんです。此奴の業に相違ありません」

「常習者だな。若い女に似合はない太い奴だ」と靜子を見下して居たが「エ、と、取調べの必要上後からお前を呼び出すか知れないが、住所氏名を云つてくれ」手帖を出して、詳しく書きとめた。

「よろしい。犯人は確に受け取つた」

「どうか宜敷願ひます」牛乳屋は車を引つぱつて走つて行く。

「オイ、起きろ。警察へ行くのだ。今更泣いたつて詮方が無い」と巡査は靜子の手を引つ立てる。

「どうぞお許し遊ばして下さい。妾はそんな事を爲るものではございません」

「でも此の牛乳を盗らうとしたぢやないか」

「盗むなんてそんな恐ろしい事をする氣ぢやございません。此の子がお乳汁を欲しがるもんですから、これを飲まして、そして代は此處へ置くつもりでございました牛乳を賣る家でもありましたら、無論其處で購つたのでございましたが、この近處にそんな家も見當りませず、つい、子供に飲ましたいが一杯で……お金さへ後で出せば好いと思ひまして、それで手を出したのでございます。どうぞお察し遊ばして お許しなすつて下さいまし」靜子片手に泣き入る國雄を抱きながら、片手で巡査を拝んだ。

「代を拂ふつもりだと云つて、誰にことわつて拂ふつもりだつたか、そんな事はいかん。辯解があるなら警察でするが好い。兎も角も警察まで來い」

「でも……どうぞお許し遊ばして下さい」

「いかんと云つたら不可」と無情にも靜子の手を強く引いた。

靜子は引かれて蹌踉と起つた。

××警察署へ引致された靜子は、司法主任の出勤されるまでと、其のまゝ留置場へ押しこまれた。

靜子は板敷の上へ打ち倒れたまゝ、我を忘れて泣き入つた。

（二六）闇

（八）

泣いて泣いて泣き通した靜子は、晩秋の夜明けの、膚を刺す冷氣に軀を顫はした。

泣き腫れた眼を拭ひながら視上げると高い鐵の窓がホンノリと白みかゝつて居

る。

國雄はと視ると泣き疲びれてかスヤ〳〵と眠つて居る。

恐しいこんな所へ這入つたのも知らずに、母の懷にあると思つて、泣き寢入りながらにも安心らしい顏で、何の恐怖もなく寢入つて居るのである。

靜子は兩袖で緊と包んで抱きしめた。

回顧してみると、昨夜からの事が全然夢の如である。夢ならば疾く覺めて欲しいと思ひながら、四邊を視廻した。

隣りの室にも結ばれぬ夢の覺ましやうなく、夜の明けを待ち疲れて居る者があるのか、身悶えする氣配がする。

漸々と明け行く空に、窓から差しこむ光明が房の裡を朧ながらに照らし出す。

一右も左も、背後も、厚い板がヒシと張りつめてあつて、前の一方だけが扉になつて居る。それが亦嚴丈な作り方で、見るだけでも嫌な厭な氣持ちがする。加之、何とも假令方の無い一種異樣な厭な臭氣が鼻を掠めて、ともすると嘔吐を誘ふ如で

ある。

靜子は二目とは見る氣になれなくて眼を閉ぢてしまつた。閉ぢた瞼からは熱い涙が浸んで出て流れて落ちる。

と、いつの間にやら平野子爵の邸宅の樣が閉ぢた眼に映つて來て、良人國衛が重ねた厚い褥の中に平和な顏して寢入つて居る態姿が浮いて出る。其の傍には俊子が幸福らしい顏をして寢亂れ髪を搔きあげて居るのが、活動寫眞でも見る如に現れる。

靜子は自分一人が底の知れない、暗い、恐しい、周圍には針や劍の突き出して居る中に、細い繩を賴りに釣り下がつて居て、國衛と俊子との幸福な生活を覗いて居る如な氣持ちがする。心臟が躍る。臟腑が沸き返る。そして血が熱して涙となつて迸しつて出る。

其の胸部へ冷たい劍が直と當てられた。

靜子はハツとして胸へ手をやると、國雄の冷たい小さな手が乳房が搜つて觸れて居るのである。

「ア、國雄さん」と寢入つて居る國雄の顏を覗いた。

「お前も仍且お父樣にお目にかゝれない。妾も最う死ぬにも死ぬない……と云つて、こんな耻かしい身になつて什麼して生存て世間へ出られませう。國雄さん、お前も此のお阿母樣もどうして、什麼してこんなに、こんなに情ない事ばかりになるのでせう。什麼因果が母子二人の身につき纏つて居るのでせう……死にたいわねえ、一思ひに死んでしまいたいわねえ……それにお前のお父樣は仍且此の阿母樣を怨んで居らつしやるのよ。憎い〳〵女だと思つて居らつしやるのよ。女の道を知らない人で無し、畜生にも劣つた外道の如に惡んで居らつしやるのよ……此お母樣は什麼したら好いんだらう……」

靜子は突俯した。

「オイ、飯だぞ」と扉の下の方を三寸角程切つた差し入れ口から細長い箱が差しこまれた。

「オイ、取らんか」と巡査の嚙みつく如な聲が續いた。

「ハ、ハイ」と靜子は恐ろしいものでも觸る如に箱へ手をかけた。

「汁だぞ」と今度は汚い生地椀に糠の洗ひ汁の如なのを入れたが差しこまれた。

靜子はそれを取る事はとつたが、見る氣にもなれなかつた。

噫、音樂家として、日本隨一の聲樂家として、錦繡羅綾にも包まれた身が何と云ふ落ち果てやうだらうと思ふと靜子の身の肉も骨も、ばら〳〵に放れて落ちる如な氣になつた。

喰ひしばつた齒の隙から泣き聲が漏れた。

（二七）闇　（九）

靜子は嬢て司法主任の取調べを受ける事になつた。

「お前の住所は何處で、名前は何と云ふのだ」と警部は恐しく光る眼で靜子の顏を覗ながら訊いた。

「只今の住所は芝の二本榎の西町でございます。名前は立花……靜子……」

「立花靜子？」警部は驚いた。

「ハイ」と微に。

「嘘を云ふと承知しないぞ」

「否、立花靜子でございます」

「同姓同名か知ちないが、立花靜子と云へば有名な音樂家だぞ」

「ハイ……少しばかり音樂の方にも顔を出して居りました。その立花靜子でございます……」と靜子は消え入る如に云つて涙を潸々と落した。

警部は聽き取り書きを書きかけた其の手の筆をカラリと置いて、射る如な眼で靜子の顔を凝視めた。

「立花靜子。然だ！」

× × × × × × × × ×

其の日の午後の四時頃であつた、二本榎の靜子の家へ三臺の俥が着いた。

前のが越田逸郎、次に、國雄を抱いて死人の如に蒼い顔をして居る靜子、最後には進が居た。

皆が家へ這入つて鼎になつて坐つた時には三人心々の何とも云へぬ感じで、暫時云ふ事も知らなかつた。殊に靜子はたゞ涙のみが流れて、放免になつた嬉しさと、更に越田の手に捕はれた苦惱と、捨てるにも捨てられぬ我生命の、あるを怨む悲哀の感と、それらが胸の裡を搔き亂して、身の置き所さへ判へなかつた。

「オイ、靜子、お前は何と云ふ態の惡い事をするのだ」と進は燐寸で煙草に火をつけながら、重い聲で口をきつた「あの警部が幸ひにお前の名を知り、又音樂會なんかでお前の顔を見知つて居て、豈夫牛乳泥棒なんかをする者でないと知つて、直俺を呼び出して、引き渡してくれたから好い樣なものゝ、若し普通の詰らない者と一緒にされて、監獄へ送られでもしたらお前は什麼するのだ。國雄を泥棒の子にしてお前は國衞君に顔が立つゝ思ふのか、否、世間へ對して什麼顔出しをするのだ」

「マア、そんな事は今になつて云はなくても好いぢやないか。靜子さんだつて其れ位の事を知らない女ぢやなし、そんな事を云はないだつてよく判つてるだらう。それより靜子さんが大分疲勞て居る樣だから、又、軀に障つて惡くなつては不可いねえ靜子さん」と越田は靜子の方を視て『暫時お寢みなさい。然して、氣が落ちついてから、何にも彼も相談する事にしませう』」

「……」靜子は無言のまゝで點頭いた。

「それ見ろ、何彼につけて越田君の此の親切を視よ。それを疎々しくして俺等の居ない間に逃げ出したりなんかするから天罰が當るのだ」

「そんな事を今云はなくても好いよ」と越田は笑ひながら制めて居る。

「否、こんな機に云つて置かないと、身に滲みない。ねえ靜子、お前もいつまでもこんな事をして居れるもんぢやない、早速越田君と結婚するが好いぞ」

靜子は顏を外向けた。

「お前はまだ國衛君にどうか爲て貰はうと思つて居るか知れないが、國衛君は最う

此の世には居ない人間だし、いくら什麼思つても駄目なんだから諦らめて了ふが可い」

「エ？。國衛樣が此の世に居ない人間？」と靜子は自分の耳を疑ふて居る。

「然さ、國衛君は死んでしまつたぢやないか」

「エッ？」と靜子は仰天した。

「今朝の此の新聞を視ると判る」と進は新聞を取つて靜子の前へ投げ出した。

靜子は眞蒼になつた顏に眼ばかり血走つて凄い。取つた新聞を凝然視る。

春陽丸が難破したのだ。國衛君はそれに乘つて居て溺死したのだ。

「アーッ」と叫んで靜子は仰反つた。

裏の塀越に視える葉の凋落した柘榴の樹に飛びも得やらぬ秋の蝶が一つ、弱い羽を振つて居る。それを蟷螂が、無殘にも鋭い爪で、引つ掻いて抑へて居る。

（二八）闇

（十）

「國衛さんを返して下さい。國衛さんを返して下さい。何故返して下さらないの、妾が……妾が……不貞だからですつて、否、妾は、毫も、毫も、軀を汚したりなんかして居るのではありません。軀……軀、それ所ぢやありませんわ、心だつて些とも、エヽ、見て下さい、こんなに綺麗ですわ、綺麗でせう。ホヽヽ、あの國衛さんと一緒に買つて來て植ゑた花、それ、そこに咲いてるでせう。アラ、その花を持つて往つちや不可いわ、不可いんですよ。アヽ、花も一緒に國衛さんを、奪つてしまふんですもの、酷い、酷いわよ。ねえ、國雄さん、お前と妾ばかしを皆が、皆が酷めるんですもの、國衛さんを返して下さい。エ？、國衛さんが死んぢまつて？。嘘よ嘘だわ。隠して居るんだわ。隠してしまつて、アヽ、國衛さんが、あの雲の裡から國衛さんが……妾を白眼んで居らつしやるんだわ。妾は、妾は何も悪い事はありま

せん。誤解です……誤解です。それは貴郎が妾を知つて下さらない……妾は死んで心をお目にかけませう。死んで眞實の心をお目にかけます」と靜子は國雄を抱いたまゝ、蠱りと立つた。

「コレ靜子、靜子、何を云ふのだ。お前は何を云つて居るのだ。靜子、靜子、氣を確にしてくれ、靜子、靜子、氣を確にもつてくれ、オイ、何を云ふのだ」と流石の進も顏を眞蒼にして靜子の袖を摑んで居る。

「氣の小さいもんだな、こんな事位で狂氣になるなんて」と越田は靜子の顏を見上げた。

「越田さん、何とかしてやつて下さい。困りますよ。これぢや。眞實」と進は眞實困つた顏をして居る。

「最う何とも詮方が無い。然し、結句此方が僕の望む所だ、どんな事をしたつて本人にはお判りが無いんだから」

「串戲云つちや困る。氣狂ひにして置いてそれを自由にするなんて、全然無法だ」

進も越田のあまりに亂暴なのに、否、寧ろ獸的なのに驚いた。

「無法だとは什麼云ふ言語だ。國雄さへ救助たらは靜子さんを僕の妻にすると云ふ契約ぢやないか」

「それは正式の結婚をさすとは云つたが、こんな氣が狂つて居るものを、自由にしやうなんて、足下にも似合はないぢやないか」

「今になつて、そんな不服らしい事を云ふのは君こそ、平素の惡黨にも似合はないぢやないか」

「だつて、僕だつてたつた一人限りの妹だ。正式の結婚なら、無論どこまでも勸めるが、こんな事になつて居るのに、それを……」と云ひかゝるのを越田は遮ぎつた。

「そんな事を愚圖々々云ふ必要はない。僕はたゞ、靜子さんの肉體、それさえ得たならそれで好いのだ、氣狂ひだつて何だつて肉體には格別異つて居る所はない。靜子さんは僕が約束通り貰つて行く」

「そんな亂暴な事を云つたつて」と進が越田の方へ詰め寄らうとする隙に靜子は突と庭へ飛び降りた。

「アラ、貴夫、俊子さんと二人でそんなに妾を……否、妾も連れて行つて下さい。其雲の上へ妾も乘して下さい。ア、、國雄も乘りたいと云つてるんですわ、貴夫、貴夫……」と、靜子は裾も亂れ、髪も亂れたまゝに戸外へ駈け出すのである。

「靜子」と進は追つかけた。

「ア、、又越田のあの嫌な犬が追つかけて來ろ。貴夫、妾を救助て下さい、妾は、妾はそんな不眞な女ぢやありません。妾の此腹を切り裂いて見て下さい、貴夫」と空を見つめて一散に駈け出す。

「靜子、待て、靜子」と進は追かけて靜子の袖を引掴んだ。

「ア、鬼が國雄を奪りますよ。救助け下さい」と靜子は叫びながら強く振りきつた途端を喰つて、進は蹌踉と倒れた。

「サ、國衛さんを返して下さい。國衛さんを返して下さい」靜子は風の如に走つ

た。

何處から送られて來たか、柳の落葉が風に弄ばれて靜子の跡を追ふて片々となる。

國雄の泣き聲が夕暮の巷に殘る。

（二九）危險

警察では、靜子の前身を思ふて絶体に秘密にして居たのだが、耳の疾い新聞記者は何處から什麼して聞き出したのか、靜子が警察へ引致された事を知つて、其の翌日の紙面に書くも書いたり、一號活字の二段ぬきで書いて居た。

「聲樂家立花靜子窃盗となる」と云ふ如な標題は滿都の人の目をひいて、以前聲名があつただけに一層噂が高まつた。

＊　＊　＊

朝飯を濟ましてから自分の居間へ這入つて、机の上に小間使が置いて行つた新聞を取つた一忠は、何心なくそれを擴げた。

飛び〳〵に大きな文字の標題だけを見て居た一忠の眼に、立花靜子の文字は直讀めた。

「呀」と云つて走る如に其の記事を讀んでしまふと新聞を摑んで部屋を飛び出した。

「阿母樣、靜子は東京に居りますよ」と障子の外から聲をかけて一忠は茶の室へ這入つた。

夫人と茶を喫みながら何か談しあつて居た中將は暫と一忠を見て、

「騷々しく何ぢや」

「靜子の家が判明りました」

「エ？、靜子が居りますか、此東京に？」

と、夫人は飛びたつ如に云ふ。

「窃盗を働いた嫌疑で警察へ引致されたのですが直に赦免されました」と一忠は両親に見せた。

「マア、國雄に飲ませるとて牛乳を……」と夫人は眼に涙を溜めた。

「それ程窮困をして居ても、何處へも縁づかず、國雄を育てゝ居るものと見えるの」と中將も聲に曇りがある。

「何は兎もあれ、早速、その芝の二本榎の西町まで往いて、みちや什麽でせう」

「好えちやらう、金を些と要意をして行つて、當分め生活に差支へないだけにしてやつて國雄だけを引きとつて歸るのぢや」と中將は顔を外向けて「國衛は生死不明であるし、若し國衛奴が死んでしまつたものとすれば、國衛の心の遺つて居るたつた一人の忘れがたみちや、よく氣をつけて大切にして國雄を連れて來い」

「ハア」と一忠も俯向いた。

夫人は眼を押へながら、

「平野の邸家を出る時に遺して置いた手紙にも、平野子爵御一家の人に對して氣を

兼て、國雄の事と云つては一筆も書かなかつた、それだけ餘計國衛の心には心殘りがあつただらうと思ひます。靜子の在所が知れましたら、直に國雄は引きとつて、國衛が小さくなつて歸つたと思つて妾も出來るだけの事を致しませう」

「よく氣をつけてやるが好え」

「ぢやあ僕は早速行つて宜しいか」

「お前と一緒に妾も參りませう。貴夫お許しが願へますでせうか、靜子にも久しぶりで會つて種々話したい事もございますから」

「お前の自由にするが好え」中將は起つて茶の室を出た。

夫人は喜んで急いで支度をした。

夫人の伸と一忠の乘つた俥どが勢ひよく佐久良邸の門を出たのは十時前であつたらう。秋晴れの透きとほつた蒼い空に日光が金色に美しく、何となく春めいた如な氣持ちがする。それが夫人には却つてうら悲哀く感じられる。國衛が居て、そして國雄と靜子を迎へに行くのだつたらどんなに嬉しからうと、そんな事を考へては密

と涙を拭いた。

俥が公園前を走つて居る、其の前へフイと飛び出した者がある。

「危險ッ」叫び聲が俥の上も下も一緒だつた。

（三〇）靜子の行衛（一）

「呀、進君ぢやないか」一忠は俥の上から聲をかける。

「佐久良さん。呀、夫人！」と進は一足退つた。

「オイ進君用がある」と一忠は俥から飛降りて「君には大に云はなきやならん事がある。だが、今は云はない、後で云ふ機會があらうから、其まで待つとして、先訊かなきやならん事は靜さんの事だ、漸と榎町に居る事を知つて、今母と二人で訪つもりで出て來た途中だが、君に此處で會つたのは幸だ。靜さんは仍且國雄を連れて其西町とかに居るんだらう。君は其住居を知らん事はあるまい、僕等を其家へ同行し玉へ」

「ハ」と進は頭を抱へて、額から汗を出して居る。

夫人も俥から降り立て傍へ寄つた。

「久濶でしたね、其の後は什麼しましたか些とも賴りを聞きませんでしたが變る事はありませんか」と夫人は優しい。

「ハ、どうも、飛んだ御無沙汰を致しまして、誠にどうも相濟みません」と進は頭を下げて居る。

「今一忠から云ひました通り、靜さんの許を訪ねやうと思つて來ましたのですが、どうかお氣の毒でもこれから同行して貰ひたいと思ひますがね」

「ハ」と、進は狼狽して「實は、その靜子が居ないのです」

「オイ進君、君はまだ隱さうと思つて居るのだらうが、靜さんの事は今朝の新聞に出て居る。窃盗の嫌疑で警察へ引致された事も、芝の住所もそれで分つたのだ。最う君が隱さうとしてもそりや不可ない

「最う新聞に書かれましたか……僕は昨夜から徹夜で歩行き廻つて居るので、何も知らなかつたのですが」

「徹夜して歩いて居る？」と一忠は進の顔を見た。

「靜子を探して居るのです」

「靜さんを？」と夫人は思はず前へ出て「靜さんは什麼したのです。榎町に居るんぢやないのですか」

「昨日まで居りましたが、昨日から飛び出して了つたのです」

「什麼して」

「靜子は遂々氣狂ひになりました」

「氣狂に？」と一忠は進の肩口を摑んで「オイ、君は、靜さんを氣狂ひに爲てしまつたのか」

「靜さんが氣が狂つたつて」と夫人は早潛々聲になつた。

「面目がございません。たつた一人の妹を氣狂ひにして、僕は……」

「情無いと思はないか、悲しいとも思はないか、靜さんが氣狂ひになるのには、なるだけの原因がある。其の原因の大部分は君が作つて居る事は僕はよく知つて居る君もまんざらの馬鹿ぢやない、多少の良心はあるだらう、其の良心に問ふて、自分の身を省みたなら、沈として居る事は出來なからう。君は靜さんを什麼する心算だ」

「何とも申し樣がありません。昨日夕方靜子が氣が狂つて飛び出しましてから、僕は其の後を追ひ廻つて探して居るのですが、昨夜一ばん中歩き廻つて居ります間、寢とした、草も木も寢沈まつて居る時、歩きながら考へますと何とも云へぬ悲しい氣になりまして、今までの行爲がつく〳〵後悔されました。たつた一人の妹を氣狂ひにして、今自分はそれを探し廻つて居るのだと思ひますと、天空に冴えた月を浴びて居るのが恐ろしく思はれまして、夜更けの冷たい風が膚に觸れるのが、此の軀を鋭い及物でチク〳〵刺す如な氣がしまして、幾度聲を出して泣かうとしたか知れません。僕は眞實眼が覺めました」進は拳で眼をこすつた。

夫人は傍で涙を拭きながら、

「貴郎が後悔なすつたのは誠に結構ですが、靜さんの氣の狂つた原因はと云へば仍且國衛の事が原因となつて居るのでせう。然だとすると妾等にも矢張り責任があるのです。何にしても氣の狂つて居る者が國雄を連れて出てしまつて居るとすると、どんな事になるか判りません、どうも心配でなりませんから、疾く警視廳の方へでも願つて捜して貰ふ事に致しませう。ねえ一忠然して下さい」

「然です。それが好いでせう、ぢやあ一先づ邸へ歸りまして、早速其の手順を致しませう。進君、君も邸へ同行し玉へ」

進は俯向いたまゝ、頭を低う下げた。

（三一）靜子の行衛（三）

後の月も三日前に過ぎて、今日は十六夜の月が蒼い空高く皎々と照つて居る。

品川沖の砲臺や緒明造船所などが飛び〳〵に、風の無い穩な海の中に黑く視えて浪頭が月光に、金砂銀砂を撒いた如に煌々と光つて居る。

時は十二時を過ぎて、最う一時近いであらう。

大字利田新地の突端、目黑川が海へそゝぐ水音が、更けた夜の寂さを一層滅入らす如に、潺々として流れこむ、それを押し返す如に寄せて來る波浪が岸を嚙んでヂヤブンと鳴る。と、白い飛沫が玉と散つて。それが亦、月の光りに五色に燦めく。

「サア、國衛さんを歸して下さい。國衛さんは妾の良人です。否、俊子さんの良人ではありません。此の靜子の良人です、サア、返して下さい。妾が連れて居るのは國雄ですよ。國雄は良人の子です。國雄をどうするのですよ。アラ、貴夫、そんな高い所から妾を、妾を睨んで居らつしやるの、此の國雄が不義の固形ですつて、そんな事はありません、それは慘酷です。妾の心は皆神樣が知つていらつしやいますあの神樣に訊いて御覽遊ばせ、あの美しい神樣に、アハ、、神樣が美しい圓い顏して笑つていらつしやるでせう。噫、妾の心はあの神樣に」と靜子は冴えに冴えた月

を見上げては、蹌踉と足も定まらず歩いて居る。泣いて居るかと思ふと突然に泣き出す。片手には國雄を引つ抱えて居ながら、片手では始終何ものかに縋りつかうとする如に空を摑んで居る。

國雄は母の懐へ手を差しこんで、摑み出す如にして乳房を掻き出しては吸いつくのである。が、乳汁は零れる程より出ない。力限り吸つても出ぬ乳を小さい手でたいたり、摑んだりして、其の果が泣き出す。泣いても叫んでも、母は何も知らぬ泣き疲労てうと〳〵と眠ると、母の叫ぶ聲に起される、起きると空腹に堪え兼て、乳を探る。探つては泣き入つて居るのである。

「何ですつて、越田と妾とが、ア、、そんな酷い事を貴女は仰しやるの、まあ、妾を、こんな所へ置いて、俊子さんは國衞さんと一緒に其所から見て笑つてらつしやるの。妾は死ぬより辛い身を引き裂かれて打ち碎かれるより悲しい思ひをして、そして良人を貴女に差し上げたのぢやありませんか、妾は、妾は」と靜子は磴と倒れイ泣き入つた。

國雄は驚いて激しく泣き出した。

夜は寂と更けて、月の光りのみが鮮明に。

靜寂な浪の音！

遠い、遠い所から、絶れつ續きつ、船歌の聲。

時が經つてから靜子は飛び立つ如に起きあがつた。

其の背後へ暢然と、乞食か、船頭か、汚い老人が立つた。

「オイ、えらく小供が泣いてるぢやねえか」と靜子の顏を覗いて、その美しい、凄い顏に慄然したのか、後方へずつと退つた。

「貴郎は國雄を殺すのですか」

「エッ」と老人は喫驚した。

「妾は國雄が死ぬなら、生存ては居ません。妾の生命で國雄を救助て下さい」

「私はそんなものぢやねえや」

「呀、越田が妾を、救助て下さい。手ごめにします救助て下さい、貴夫貴夫」と駈

け出す。

「危險いッ。アッ、墜ちると大變だ、危險いッ」と抱き止めやうとする手を振りきつて、

「アレー、越田が、越田が」と靜子は悶える。途端に、手が緩んで、抱いて居る國雄の軀はスルリと脱けて、岸から淘然と水の底！

「呀、落しやがつた」と男は狼狽る。

靜子は知らずか一散に走つて、行衛は知れぬ。

（三二）別莊

低い生垣を越して、前は廻と海である。

俊子は椽の柱に凭れて、透き通つた秋の清い氣の中に、最う眞白に見える芙蓉峰を、うつとりとして眺めて居る。

「今日は眞實によく晴れましてございますね」と、小間使の富が、鉢植の秋海棠を飛び石の上に置いて、花の方を此方に、些と向きを變へさして、俊子の顏を覗上げた。

「然ねえ」と答辭をしたが、俊子は何を考へてか、頤を襟に埋める。

「御氣分でもお惡うございますか」と富は氣遣はしさう。

「否」と、微に太息が漏れる。

「でも何だか」と云ひかけて椽へ寄つて「あまり御心配遊ばして御病氣にでもおなり遊ばしては大變でございますよ」

「……」俊子は遠い果しの無い海の上をずうつと見た。

紺碧の水が、冴えた蒼い雲と一つになつて、其の間を白帆が、二つ、三つ。鷗が縫ふ樣に其の間を横に飛んだ。

俊子の眼には涙が湧いて居る。

「若樣がお乘り遊ばした船が、難船して、若樣のお行衛が知れぬと云ふだけでまだ

何もお遊去遊ばしたと決まつた譯でもありませんのですから、何かのお便りのあるまで、お氣を丈夫にお待ち遊ばさないと、およろしくはございませんよ」と富は俊子を慰める。

「そのお便りがいつあるやら」と俊子は襦袢の袖で涙を拭いて「妾が、あまりに考へ過ぎたのか、又、考へが足りなかつた爲か知らないけれども、妾はどうかして、靜子さんと御夫婦になつて戴いて、妾の奪つた幸福を靜子さんにもあのお子にもお返しした其の上で、妾の以前の罪を赦して戴かうと思つたのが、皆仇になつてしまつて、妾は眞實に生存て居れない」

「そんな事を仰しやつて什麼遊ばします。今貴婦が、そんな氣におなり遊ばして、變な事を遊ばす樣でしたら、それこそ貴婦は濡衣をお召しになつたまゝ、其のお心の底も人に知られず、若樣に對しての御貞心も水の泡となつて、情ない事になつて了ふぢやございませかん」

「最う何も彼も水の泡となつて居るんだもの……それに、お父樣は妾に國衛があんな事になつたのは、お前が不貞な事をしたからだ、國衛の顏に泥を塗つた其の爲だ平野の家に拭ふ事の出來ない汚れをつけた其の故だ。若し國衛が此のまゝ歸らないか、或は船が難破した時に、生命を落して了つて居る樣だつたら、お前は國衛の下手人だ。國衛を殺したのは手を下さないでもお前の爲業だゝと仰しやつて、邸宅にも置いて下さらないんだもの。妾は親にも見放されて了つて居るんだわ」

「それも御前樣が貴婦のお心をよく詳知て居らしやらないからなんですよ。貴婦のお心がよく知れましたら何でそんな事を仰しやるもんですか」

「だつて最う妾の心を知つて貰ふ時が失くなつてしまつたんだわ」

「そんな事はございません。然して貴婦は、親にも見放されたと仰しやいますけど御前樣もあの佐久良樣の方へ對して、たゞ云ひ譯の爲にあんな強い事を仰しやるだけで、其の實何で其樣お心がございませう。其の證據には這して此の大磯の別莊へ貴婦をお送り遊ばして陰で何彼と御心配遊ばして居らつしやるぢやございませんかそれからお考へ遊ばしても大抵、御前樣のお心も察しがつくぢやございませんか」

「お前は然お云ひでも、お父様はどんなに御立腹遊ばして居らつしやるか、それは分らないんだものねえ……それに國衛様のお身が什麼おなりなすつたか判らないんだし、妾は最う眞實に……」俊子は足の爪先へポロ、、と涙を落した。

富も胸が一杯になつた。

勝手の方で誰やら大きな聲で呼んで居る。

(三三) 桐の落葉

佐久良邸の座敷には平野子爵が中將と膝を接して語り合つて居る。

「國衛の行衛、否、生死が判らんので俺の方では出來るだけの手を盡して調べさして居る。ちやが、まだ何處からも何の便りが無いのぢや。康もそれを非常に心配して、國衛の身に若しもの事があつては佐久良の家へ對して何と云つてお詫を爲やうかと、そればかりを苦にして、毎日毎夜泣かぬ時は無い。無事に居て無事で歸つて

くれる樣にと、神參り、佛參りも一心になつて行つて居るが、二三日はそれを苦にして大分體軀の健康を害したらしい。俺も此の頃は國衛の事ばかりが氣になつて、政界の事も何も頓と手につかない。什麼かして疾く、國衛の安否を知る方法はあるまいか、どうも思案に餘つて相談に出て來たのぢやが、貴公はどう思つて下さる」

「御心配下さつて重々に恐縮しますぢや」と中將は頭を下げて「こんな事で御心配をかけるのも國衛奴が、あんな馬鹿な眞似をしますからぢや、私は國衛が何處にでも居ると云ふ事が判れば、飛んで行て引き摺つて歸つて其罪を謝らなけりやならんと思つて居りますぢやが、肝心の彼奴の生死さえも知れんのには困つて居りますぢや。どうか其樣御心配を爲て下さらん樣に、然して打つ捨つて置いて貰つた方が好えと思ひますのぢや」

「否、然云はれると俺の方でも一層辛い。貴公でも親子の情として、死んで居るか生きて居るか分らん子供の事を案じんと云ふ事は無い。俺等への義理とか、何とか

と云ふ事はそりや平素の事で、這云ふ場合にそんな他人らしい氣で居て貰ふてば實に俺も幾倍辛い思ひをするか知れん。こりや仍且、お互に腹を曝露出しての相談にして貰ひたい。でなければ俺の方も非常に困るのぢやから」

「それでは却つて恐縮する譯ぢや」

「それに國衛は俺の方から無理に貰ひうけた者ぢや、それをこんな事にしまつては何とも此家へ對して申し譯が無い。而も其の原因と云ふのは、俺の娘の俊めが馬鹿な事を爲居つた結果なのぢや。面目が無くて、當然なら這圖々しく出て來られる次第ぢやないのぢやが、さりとて外に相談するものも無い、それで此面に面を被つて出て來たのぢや、どうぞ俺等夫婦の心裡を察して、好え相談がして貰ひたいのぢや」

「それは益々恐れ入らざるを得ない事ぢや。然云ふお言語では私の方で何と申し上げて好えか、分らなくなつて來る」と中將は眞實恐縮した體で「然して俊子さんをお邸宅から出されたと云ふ事ぢやが、何故然酷な事をなさるのか、それではどうも

面白く無い樣にも感ひますぢや。全体俊子さんは什麼爲すつたのですかな」

「あれは大磯の別莊へ追ひやつてあるのぢや。然して別莊からは一足も外へ出さない樣にと云ひつけてあるのぢや。又、何人が訪ねて來ても、一切面會をする事ならぬと嚴しく命じてあるのぢや。俺は、國衛が若し、萬が一にも、不幸にして難船の際死んでしまつて居ると判明したら、あの俊めに直に自殺を爲よ。美事に自殺をして、そして佐久良一家を初め世間に對して申し譯を爲いと命じてあるのぢや。ぢやから本邸に置かずに、別莊の方へ追ひやつて、國衛の生死の判明するまで謹慎さしてあるのぢや」

「それは餘りに殘酷ぢや。加之、俊子さんを失くしたら、平野子爵の家の血が斷える」

「それも致し方が無い。彼奴の如な汚れた血は續けない方が宜えかも知れんからの」と子爵は暗然とした。

椽先の梧桐の葉が風に拐かれて婆娑と落ちた。

《三四》

「夫は不可ん、夫は不可ん」

中將は暫くして首を振つた。

「俊子さんを別莊へ遣んなさる……夫は兎も角として國衛が何うなつたからとて自殺せい……其麼無謀な事があもるんぢやない、殊には平野子爵家に一粒種の俊子さんぢや、血統を絶やしては御先祖へ對し誠に申譯が無い」

「其血統も血統ぢや」

子爵は如何にも苦しさうに

「清い汚れのない血統と違ふ、濁つた血は平野家へ殘さん方が宜い、先祖へ對し却つて申譯がない、俊子の事は貴公、別に心配して下さらんが宜い、只心配なのは國衛の生死がぢや」

「イヤ夫りや違う、國衛の事こそ抛つて置いて下さるが宜いのぢや、俊子さんの事に就いては少し考へとる事もあるぢやで、マア其樣亂暴な事は口になさらん方が宜え、夫では却つて私共が恐縮をします、全くでごわす、少し其考へもあるので、余り過激に考へて下さらん事をお願ひして置きますぢや」と子爵の顏色を窺ふたが、子爵はモウ堅い決心をしてゐるらしく眉一ッ動かさなかつた。口を噤んで凝乎と自分の膝の先の卷莨入に眼を落してゐる。

「實際何でごわす、さう云はれると俺共が又凝乎として居れぬ事になるで厭が應でも國衛を此所へ引摺つて來てお詫をさゝんければならぬ事になりますぢや、所で其國衛ぢやがな」と迄云つて急に言ひ淀んで了つた、両者の間に暫く沈默が續いた。

「何うか法は無いものかな」

子爵は又重ねて斯う云ひ出した。

「詞いやうぢやが何も彼も全く、娘の俊めの放埒から斯う云ふ事になつて夫で國衛の行衛が眞實判らぬ事になると、私等夫婦は何の面下げて社會へ顏出しが出來やう

仍で相談ぢや、何とか貴公、好え考へはなからうかな、後の事はマア措て置いて貰ひ度いので」

「さア」

中將は腕を拱いて是亦當惑の眉を顰めたが、是とて別に纏まつた思案が泛ぶのでも無かつた。只年老いた子爵が我子の爲めに切ない苦しい、身を刻まれるやうな思ひをしてゐる其態が如何にも痛々しく氣の毒でならなかつたのである。

子爵が火鉢へ力なく掛けた手の指にはさまつた卷莫の先へ、只徒らに白い白い灰が長う延びて行く。

（三五）其の心（一）

香港から神戸港へ歸つた汽船阿波丸の船客の中に一人の病客があつた。

それ、曩日春陽丸の難破の際救助された一人で、名は佐久良國衛！

國衛は一時言云ふ事も出來なかつた。生命も危篤と云はれて居た。が、醫師があらん限りの手を盡しての介抱に、運よくも生命は取りとめられた。漸く言語を發する樣になつてから、住所姓名を尋ねられたが、國衛は業と秘して居た。だが、秘し了せる事の出來ぬ場合になつてから、遂に養家の平野を云はず、實家の佐久良の姓を名乘つた。

香港へ船が着いた時に、國衛は上陸すると云つてきかなかつたが、醫師はそれを許さなかつた。醫師の許さぬのを聽いて船長も亦許さなかつた。然して國衛は遂に神戸まで送り歸されたのである。

神戸へ着すると國衛は海岸通りの戸山病院へ入れられた。

國衛は自分の軀を自分で什麼する事も出來ぬのを知つて、詮方なく病院の一室に身を横たえ、快癒の日の來るのを待つより詮方が無かつた。

それでも國衛は自分の身の事を、平野家や佐久良の家へ通知する事を爲なかつたが、親友の柴原雷藏だけへは、事の顚末を看護婦に話して、其の談話を其のまゝの

筆記にして、それを郵送した。無論末尾には、何れへも絶體に秘密を嚴守してくれと附記した事は云ふまでもない。

斯して國衛は病院の一室に在りながら、自分の過去及現在を考へ、それからそれと想ひをつゞけて、靜子の事、國雄の事、俊子の事、平野の家の事にまで想を走せて、云ひ知れぬ感ひに鎖された。

子として父の意志に反く事が出來なくて、何等愛情も有たぬ女と結婚した苦痛。終生妻と思ひ定めて熱誠の愛を傾けた妻に背かれた心の懊惱。我が生命にも代える程の愛兒を心にもあらず捨てた煩悶悲哀。それっが夜も晝も胸に往來して、國衛は悶え苦しんだ。悶えて疲勞てうと〳〵眠りに入ると、氣持の惡い夢に襲はれて、魘されるのが常となつた。然して國衛は漸々痩せ細つていつた。

「どうも貴下は神經が餘程衰弱して居る如です。あまり物を考へない樣にして、氣を十分に廣くして居る樣になさい」と醫師は度々注意をした。

國衛はそれを聽く度毎に、醫師に感謝をして居た。が、直に、同じ想を繰り返して、然して、此の後自分の軀を什麼したら好いだらうと、そんな事を間斷なしに考へて居た。

今も深い思案に沈みながら、いつともなしに、眠りに陷ちやうとすると、扉が靜に啓く音がした。

「看護婦だ」と思ひながら、眼を閉ぢて居ると、

「佐久良さん」と優しい聲がする。

國衛は顏をあげて聲のする方を見た。

「此のお方がお會ひなさりたいと仰しやいますか……」

國衛は名刺を受けた。

一眼、名刺を見た國衛の眼からは涙が湧いた。

（三六）其の心（三）

間もなく他の看護婦に導かれて這入つて來たのは法學士の柴原雷藏であつた。

「ヤア君」と寢臺に横はつて居る國衛の顏を視ると、つか〳〵と傍へ寄つて、痩せた國衛の手を握つた。

「君、態々來てくれたのか」と、國衛は握られた手を緊と握り返して、涙を潸々と落した。

「君の手紙を見ると直に發つて來た今回の事に就いては僕は君に大いに怨恨を云はなきやならん。君があんな無謀な事を爲なけりやならん程の、煩悶があるなら何故僕だけに打ち明けて云つてくれなかつた。僕の如な者にでも打ち明けて云つてくれりや、何とか手段の執りやうもあつただらう。それを何事も一切僕に云つてくれなかつたのは、僕は大いに不平だ」

「君に相談をしたいと思つた事は何回あるか知れない。だが、他の事とは異ふ。事柄が事柄だから、僕は面目なくて云ひ出す事が出來なかつたのだ。必ず惡く思はないで樣にしてくれ玉へ」

「其の事柄が事柄だから打ち明けて云つてくれりや好かつたのだ」と柴原は云ひかけて傍に看護婦の居るのに氣がついた「ヤ、飛びこむなり直に愚痴を並べて濟まなかつた。それよりは君の軀は什麼なのだ。僅な間に大變痩せたねえ」

「最う大丈夫だよ。安心してくれ玉へ」と國衛は看護婦に此の場を去つて居てくれる樣に賴んで看護婦の出て行くのを待つて「總ての事が夢の如で、何から云ひ出す事も出來ないが、平野や、實家の方からも、君の許へ種々の事を訊ねに行つただらうね。君にも迷惑をかけた事と思ふ。改めてお詫びをする」

「無論それは君の想像通りで、一忠君が僕の許へも幾度來られたか知れない、平野樣の方からもお尋ねがあつた。隨分御兩家とも今もつて御心配をなすつて居らつしやる樣子だ。一日も早く、此處に居る事をお知らせする方が好いよ」

「否、それは今暫時報らさない様にしたい。僕は最う此の上威壓で苦められるに堪られないから」

「僕も其の邊を察しないではない。それで何處へも知らさないで、脱ける如にして來たのだ。それに就て先づ君に云はなけりやならんのは靜子嬢の事だ」

「ア君、それは最う云はない事にしてくれ玉へ、僕は彼の畜生の事を聽いうとは思はん。どんな事か知らないが僕の半生を破壞した彼女の事を云ひ出されると、僕は實際堪らなく苦痛を感ずる。懇請だから彼女の事は云はない様に頼む」

「君はまだ誤解して居るのだ」

「決して誤解ぢやない」

「否、甚しい誤解だ。僕も一忠君から君とあの靜子さんとの事を聽いて以來、餘處ながら探り得られるだけの事を探つた。然して、今度靜子さんが警察へ引致された事を……」

「何？靜子が警察へ？」國衛は思はず起き上らうとした、が、軀の痛みにグタリとなつた。

「窃盗の嫌疑で警察へ引致されたのだ。其れが耳疾い新聞が直に書き立てたので大變な騒ぎになつた。僕も新聞を見ると直に警察へ行つて、署長――それは僕の知人だからに詳しい談を聽いた。靜子さんは生活の途を失ひ糊口に窮しながら貞操を守つて、國雄君を育てゝ居る、警察へ引致された夜も、君が懐かしくて堪られなかつたのだらう。國雄君を抱いて、夜逃し平野家の邸宅の前を迂路ついて居たのださうだ。靜子さんは君が飛出して居る事を知らない、俊子さんと溫かな圓かな家庭をつくつて邸に其の夜も寢て居ると思つて、然して、平野の邸の周圍を歩いて居たらしい」

「君、それは眞實なのか」國衛の手は戰いて居た。

「眞實でなけりや僕が云ふ筈はない……警察でも引致したものゝそれが有名な立花靜子であつたと知れて直に放免したのだが、其の後の消息を聞きに行かうと思つて居る中に、非常な多忙で遷延して居た。其處へ君のあの手紙だつたのだ。君も一度

靜子さんに會へばよく事情も判り、誤解も融けるだらうと。思ふ。疾く快くなつて兎も角東京へ歸らうぢやないか」

國衞は太息を吐いて眼を閉じた。

《三七》其の心（三）

「ねえ君、少し快くなつたら東京へ歸つてくれ玉へ、そして萬事の解結をつける事にすりや好いぢやないか」

國衞は柴原の言語を眼を閉つて聽いて居たが、長い太息を續けてから、

「君が何から何まで盡してくれる其の厚意は感謝するが、僕は此の軀が快復すれば直に一度決心した通り西藏へ往つて見たいと思ふ。どうか然爲してくれ玉へ」

「馬鹿な事を云ふもんぢやない。それでは君はあの靜子さんをあのまゝ捨てる氣かそして君の子である國雄さん……とか云つた其れも捨てゝ顧みないつもりかね」

「捨てると云ふ心はないが、互に這なる運命だらうと思ふから」

「君はまだ僕が今云つた靜子さんの事を信じて居ないのだな」

「……」

「つまり僕の言語を飾りのあるものと思つて信じてくれないのだな」

「そんな事はない」

「それなら何故僕の云ふ事を用ゐてくれぬのだ」

「君の厚意を感謝して居る僕だ。君の言語を用ゐないと云ふ事はないだけど、僕が再び東京へ歸らないと云ふ理由が他にあるのだから」

「其の理由を聽かう」

「それは許してくれ玉へ」

「何故云はないのだ、態々來た僕に聽かせないで、失敬ぢやないか」

「立腹しない樣にしてくれ玉へ、云ふに忍びないのだから」

「云へないと云ふ事はない、君と僕との間だ。他の者とは異ふ、君の心は即ち僕の

心、僕の心は即ち君の心、互に誓つたのを忘れたのか。元來、今度の事でも君が僕に默つて居たのを僕は大いに不平に感つて居る」

「許してくれ玉へ」と國衛は躊躇した態だつたが「僕が東京へ歸るを好まないのは最前も云つた通り、威力壓力に堪へないからだ……とだけでは判らんか知れんが、僕が歸京すれば父が必ず平野の邸へ歸る事を強いるだらうと思ふ。強いられると僕の氣性として唯々として居れない、必ず俊子の不品行の事を云ひ出して父の言語に反抗するに違ひない、然なると父は、以前僕に對して、俊子がそんな不品行な女だつたらお前へ對しての申し譯けに俊子に自殺をすゝめて俺も立派に腹を切つて見せると放語した。それがあるから、必ず何かの波瀾を生ぜずには濟まないだらうと思ふ。若し僕がそれを心配する餘り、默つて平野の家へ歸るとすると、僕は依然としてある俊子を妻として同棲しなけりやならない。あの俊子は僕に對して許嫁の間に早既に僕の顏を踏み蹂つて居る、然して結婚してから重ねて僕の顏へ拭ふ事の出來ぬ泥を塗つたのだ、その女を妻として僕が什麼して同棲する事が出來る？重ね〳〵

忍ぶ事の出來ぬ恥辱を與へられながら恩人の娘であるからと云つて、默つて其れに屈從して、同棲する事はどうしても僕には出來ない。假令僕が無神經者となつて、平野の家に同棲するとしても、あの俊子がまだ此の上に甚麼不貞不義を働いて、此の國衛の面のみならず、一家一族の名をも譽も踏み潰して了ふかも知れぬ……まだそれのみならず、養家への義理の爲に、同じ東京にありながら、僕はたつた一人の子にも會ふ機會がない、其れらの苦痛を想ふと僕はどうも東京へ歸らうとは思はぬ寧ろ生死を賭した冒險的な方へ走つて、總ての事を忘れてしまひたいと思ふ……」

「その點は大いに同情をする。だが、君の爲、佐久良の家の爲、犧牲者となつた靜子さんが可愛想ぢやないか」

「若しあの靜子が、君の今云ふ如き、僕に對して貞婦であるなら、僕は一層東京にあるのを苦しく思ふ。貞操も熱情もある靜子を餘處にして愛情も無い不義不貞の俊子と同棲がどうして出來るものか、察して見てくれ玉へ」

「それも然だ。ぢやあ僕が奔走して、平野家の緣を破つて、靜子さんと同棲の出來

るやうにすれば宜いだらう」

「だが、それは駄目だよ」

「否、僕が行つてみせる。兎も角も無法な事は止して、僕の言語を聴いて歸る事にしてくれ玉へ。必ず惡くは計らはない。然して靜子さんと圓滿の家庭をつくつて、愛兒の國雄君を立派に育て玉へ」

「……」國衛は默頭いた。縺れた糸の端を見出した如な其の心で。

《三八》　悲喜（一）

大磯を少し離れた一漁村、夜も晝も波浪の音が間斷なしに聞えて、磯馴松が不斷の琴を奏でゝ居る所に一軒の漁家がある。

「都築甚兵衛」と書いた名札が黑く煤けて薄く讀まれる。

其の入口の、反古を混えて張つた障子を啓けて、

「父さん」と聲から先へ這入つた十六七の娘、可愛らしい男の兒を抱いて居るのが今歸つただよ」

「やあ、お咲か、先生は何と云つただ」と結いて居た網を投げ出して、傍に轉つた眞鍮の煙管を抓みあげて、時代のついた莨入から莨を捻りこむ。年齢は最う五十を出て大分になるだらうが、海風に晒されて鍊ひあげた手も足も筋鐵が這入つて居さう。

「最う來なくても好えと云つただよ」と座敷へ上つて、抱いた兒の顏を見せた。

「大丈夫と云つただか」

「あゝ、最う牛乳だけ澤山に飲れば好えだよ。藥は要らないと」

「然か、それで俺等も安心だな」

「私も嬉しいだよ。こんな可愛い弟が出來ただから」

「弟にするのかハ、、、お前の子にするのかと思つてただ」

「私ハアまだ男持たねえだから子は無えだよ」

「だつてよ、あの東京さ往つてる篤太郎が歸りやお前はお上さんになるだ」
「嫌だよ、又そんな事云つて」と、顏を赧くしながら、
「父さん、此の兒を私の弟にするだが、名前はどうするだあね」
「然だつけ、まだ名前が無ねだ……何と云ふ名だか命けてあつた名が判らねえから何と云ふて好えか……弱つたそれは、品川の目黑川で拾つたから目黑……不可ねえな、待てよ、濱で拾つたので、濱太郎、ウム、濱太郎にするだ」
「濱太郎？。それでも好えだよ」
「ちや濱太郎と定めるだあよ」
「ホヽヽ、何が可笑しいだか獨で笑つてるだ。ホラ私の顏見て笑つてるだよ」
「こんな可愛い兒を捨てる奴があるだから、世間は分らねえもんだ。どれ俺にも些と抱かせろよ」
「嫌だあよ。私の弟にしてあるだに」
「お前の弟だから俺が爲には子ちやねえだか」

「然……かも知んねえがで今牛乳を溫めて飲ましてやるだあに」
「それちや牛乳を飲ましたら一べん平野樣の御別莊へ連れてつてお目にかけて來るだ。昨日俺あ御別莊へ上つた時、お孃樣にお目にかゝつて、斯々で可愛い男の兒を拾つて來ただと云つたら、お孃樣、甚う感心した顏して、是非連れて來て見せてくれろと仰しやつてござらしただ。連れてつてお目にかしくるだ」
「ちやあ私が連れてつて、お目にかけてくるよ」
「お前が行くならお前でも好えだ、然してお前行くなら、お孃さまにお土產にあの柿を持つて行くだ」
「アヽ然するだよ」
「それから若し東京のお邸から夫人がござらしたら、俺が一べんお目にかゝりに行くと云つとくだ」
「好えだよ」お咲は小さな行平から溫めた牛乳を瓶に入れて、子供に飲す準備をした。

「えら可愛い母さまだ」と甚兵衛は大きな聲で笑つた。

《三九》　悲喜（二）

「甚兵衛の許のお咲が參りましてございますが」とお富は圍際に手を突いた。

俊子は單獨机に凭れて、深い思ひに、閉されて居たが、お富の聲に顧盼つて、

「遊びに來たのなら此室へ通してもいいのよ」

「ハイ」と富は起つて行つた。

結ばれて、解けぬ想ひに惱んで居る俊子はお富の後姿を視ながら恍然として居た。

「今日は、お嬢樣」と、富に導かれて來たお咲は遠い所から手を突いて、頭を疊へすりつけた。

「こゝ、此の娘はまだお嬢樣と云つてるね」と富に注意する如に云つた。

「アラ、お嬢樣と云つた不可ねえだかね」と可愛い眼を圓くした。

「マアそんな事どうでも可いのよ」と俊子は机の傍を放れた。

「お嬢樣、あのね、この柿は此地にねえ好え柿だから、お嬢樣に進げてくれつて、父ちやんが持たして寄こしただよ」

「然、それは有り難うよ。よく禮を云つておくれね」

「それから、今日は御機嫌は如何ですつて」

「仍且相變らずよ」と云ひつゝ俊子はお咲の抱いて居る兒に眼をつけた。

「お前その兒は什麼したの？」

「あの……此の兒は父ちやんが拾つて來ただよ」

「爺やが品川で拾つて來たと云ふのは其の兒なの」と云ひつゝ俊子は傍へ寄つて兒供の顏を覗いた。

「アラッ」と、小さい叫びと一緒に「國雄さん」

「國雄ぢや無えでがすよ、濱太郎と云ふだあよ」

俊子は突如お咲の手から小供を抱きとつて、熟々顔を眺めて居たが、

「國雄さんだわ。國雄さんだわ……あら、此の着物を被て居るから國雄さんに相違ないわ。ねえ、富、御覽、この着物はお前と一緒に三ツ越で柄を見て買つて來て、妾が靜子さんの所へ持つて參つた、それに相違ないわねえ」

「え？、國雄さん？……あ、然でございますよ。確固と記憶はございませんが、然仰しやれば見覺えがある樣でございます」

「仍且然よ。國雄さんに相違ないわ。國雄さんだわ。あゝ、妾、こんな嬉しい事はないわ」と俊子は國雄を緊と抱いて頰摺りして居る。

「お孃樣嫌だあよ。濱太郎を返してくらつせ」とお咲は泣き出しさうな顔をして居る。

「ねえお咲さん、此のお兒樣わねえ、お孃樣の旦那樣で在らつしやる若御前のお兒樣なのよ」とお咲を宥めてから俊子の方を見て「だけど不思議でございますわねえ

靜子樣が豈夫御自身で大切のお兒をお捨て遊ばす樣な事はありますまいが、どう遊ばしたのでございませう」

「然だわねえ」と俊子は國雄の顏を瞬もせず凝視めながら「靜子さんは彼樣に仰しやつて居らしたものゝ、御自身の生活にお困りなすつて、不圖、お捨てなさる氣におなりなすつたかも知れない……何にしても、此の國雄さんが不思議に妾の許へ來らしつたのはよく〳〵深い緣があるんだわ。妾、一生懸命大切にしてお世話するわ」

「まあ不思議な事でございますわねえこれは必然、若樣が無事でお歸り遊ばす前兆かも知れませんのね」お富はいそいそして、

其所へ案內も請はず這入つたものがあつた。

（四〇）悲喜（三）

「アラ、阿母様」と俊子は座を譲つた。

「お父様からのお吩咐で、お前に急にお談話を爲なけりやならん事があつて、突然に來ました」と康子はお富やお咲の挨拶するのを聽いて、自分も輕く會釋を返した。

「どうも顏色もよくない樣だが、變つた事はありませんか」と康子は俊子の顏を視て云つた。

「否、何處も變る事はありません」と云ひつゝ、俊子は國雄の顏を覗いて居る。

「その兒供は何處のお子ですの？」

「これはあの、靜子さんの……」

「靜子と云ふと、國衛の以前關係のあつたとか云ふ女ではありませんか」

「ハイ」と俊子は甚兵衛が品川で救助て來た事から、今お咲が伴れて來て顏視てから國雄である事が判明つた事を話した。

「不思議な事があるものですね、仍且緣は繋がるもんですかねえ」と康子も國雄の顏を暫時眺めて居た。

「阿母様、妾、此の兒を妾の手で育てたいと思ひますが宜しいでせうか。靜子さんが、どんな事からこんな何にも罪の無い子を捨てる氣におなりなすつたか知りませんがそれは別問題として、妾は、良人に對する務としてでも育てねばならぬと存じますが……」

「それはお前の心まかせに爲ても宜しいです。併し、私の來たのはお父様から云ひつけられた事をお前に傳へる爲ですが、お父様のお言語を聽いて、それからお決めなさるが可い」と康子はお富とお咲の方を見て「些と俊子と相談する事がありますお前等は暫時彼方へ退いて居ておくれ」

二女は叮嚀に辭義をして出て行つた。

「俊子、お前は此の後の事を什麼思つて居ります？」康子は膝を進めて微聲になつた。

「妾？、國衛さんが歸つて下さらなけりやあ……」と俊子は俯目になる。

「國衛が歸らなけりやどうする氣ですか……實は」と云ひかけて康子は聲を咽喉につまらせた。

「お父様は何か仰しつてらつしやるの？」

「御立腹がどうしても解けないのです。種々と云つて見ても、佐久良夫婦に云ひ譯が無いと仰しやつてね」

「……」俊子は涙ぐんで居る。

「今まで手をかえ品をかえて探しても、國衛の行衛の知れないのは、船と一緒に沈んだと思ふより仕方がありません。お父様は、國衛は必然死んでしまつたに違ひないと云つてらつしやるのです。國衛が死んでしまつて居るとすると、此方夫婦は何とも佐久良の去婦へ云ひ譯の仕様が無い、國衛は普通で貰つたのでなくて、此方から種々な無理を云つて義理づくめにして貰つたのだから、何處までも大切にしなりやならん國衛なんです。それを死骸も知れぬ樣な死樣を爲せては什麼も中將夫婦に對して云ひ樣がありません。それも、こちらが何の失態も無いのならまだしもですが、お前があんな面目もない事をして、それが原因でこんな結果になつたのですから、猶更濟まない義理になつて居るのです。だからお父樣は、自分としては佐久良へ最う顏出しもならないし、佐久良のみならず、世間へ對して申し譯の仕樣が無いからお前に……」と云ひかけて潛々と涙を落して「お前に、自殺をさせると、それを私に云ひつけて來いつて……」と遂に顏を押へた。

「妾は自殺するのですか……」俊子は腑膓を絞る如に云ふ。

「義理と人情とからしてお前は大きな罪があるのですからねえ」と强く云つた言語が震うて居る」

「……妾は死んでお詫を致します」

（四一）滴る血（一）

「ヤア、例日の氣狂だ」と、濱に引きあげてある小船の上で、演劇の眞似をして居た腕白共七八人が、一齊に船から飛び降りて駈け出す。

「やあい、狂氣め、そら、子供をやるだあ」と破れ簑の落ちて居るのを拾つて投げつける。

「あゝ國雄、お前此處に居たの、まあ、何故母樣を打つ捨つて逃げて來たの、あら笑つてるの、何が可笑の、母樣の顏視て可笑いの、あゝ、今まで放つといて濟まなかつたわねえ、ほらお父樣が見えるでせう、お父樣は酷い方だわねえ。妾もお前も捨てといて、そして死ぬんですつて、酷いわ、酷いわ」あはれ見る影も無い迄に變り果てた靜子は投げ附けられた破れ簑を緊と抱きしめて、乳を啣ます如く素振りをしたり、急に駈け出しては立ち停まつてみたり、正体もなく狂歩いて居る。

「そーら國衞さんが來るだあぞ」と十四五の尻切袢纏を被たのが、不意に靜子の袖を引ぱつた。

靜子は蹌踉となつて凄い眼で空を凝視めて居たが、

「國衞さん、國衞さん、貴夫はそんな高い所に居らつしやるの、あゝ國雄も居るんだわ……妾も行きますよ」

と足を空にして駈け出さうとする。

「そら、疾く行けよ」と背後からトンと突き飛ばす。

突かれて靜子は、はずみを喰つて撞と打ち倒れた。

「ワーッ」と腕白共は一齊に囃し立てる。

「あゝ殺すなら殺して下さい、越田が妾の此の軀の肉を殺いで持つて行くのですつて、エ、殺されても宜いのよ」と靜子は眞砂の上に打ち倒れたまゝ、砂で摺つた手の指頭から血の浸み出して居るのも知らずに、意味も通せぬ事を喋り續けて居る。

「こりや退かんか」不意に大きな聲がしたので腕白どもはサッと散つた。

警官が帶劍の柄を握つて立つて居たのである。

「オイ、又こんな所へ來て居る、起たんか、こんな所に寢て居ちや不可ぢやないが起て」と靜子の手をとらうとして傷のあるのに氣がついた。

「又弄りものにされて居たんだな。困つたなあ此の厄介ものには」と云ひつゝ無理に引き起して「オイ、お前は何處から來たのだ。よく氣を落ちつけて云つて見よ」

穩に訊かうとする。

「呀、貴郎は、妾が牛乳を盜んだと仰しやるの、否、否、妾は國雄に飲まさうとしたゞけです、許して下さい。お金は出してあるんですから、どうぞ許して下さい」

靜子は警官の顏を見て握られた手を振り切らうと焦燥つて居る。

「そんな事を云つて居るのぢやないお前の住所……ね、分るだらう、お前の住まつて居た所を云へと云ふのだ。それが分明れば送り届けてやる。よく氣を落ちつけて住所を云つてみよ」

「國衛さんの居らつしやる所は、平野さんのお邸で、俊子さんが國雄を連れて今海

の底へ國衛さんと一緒に行らつしやるのよ」

「馬鹿な事を云つては困る。兎も角一度照會してやるから駐在所まで來い」と靜子を引つたてた。

「ア、待つて下さい」警官を呼びとめて迫と出たのは高利貸と云つた例の古田義睿である。

(四二) 滴る血 (二)

古田は警官の前へずつと出た。

「どうも御手數かけて恐れ入りました。其の狂人は手前の親族のもので、先達から家を飛び出したまゝ行衛が判らないもんですから、非常の苦心をして探し廻つて居りました。早速引きとつて歸りますからどうか、其のまゝ御引渡しを願ひます」と例の貧弱な髭を捻りながら申し譯だけに頭を下げた。

「貴郎が、此の狂人の親族ですか、それは幸ひです、實は二三日前から這して狂ひ廻つて居るもんですから、保護を加へて置かうとしても、些との隙に飛び出して、大勢のものに弄りものにされて居るので困つて居たのですが、貴郎が引取りになれば何より幸ひです。併し手續上必要ですから、貴下の住所氏名、此の狂人の氏名等も伯つて置きたいのですが、些と仰しやつて下さい」

「エ？、住所氏名？」と古田は狼狽したが、

「ハ然ですか、手前は東京市芝區南佐久間町二丁目十四番地、川上清と云ふのです この女は、手前の姪で立……立川し……なと云ふ者です」と口から出放題である。

それでも警官は手帖に鉛筆を走らして、

「それではお引渡し致します。どうかよく御注意なすつて、十分御監督なさる樣に願ひます」警官は厄介拂ひをした顏で其處を去つた。

「馬鹿ッ」と古田は警官の後を見送つて、靜子の手を掴んだまゝ、暢然と歩き出した。

「オイ、首尾よく行つたか」壁の落ちかゝつた物置らしい建物の陰から出たのは越田逸郎である。

「我輩の手腕です。仕損じはありません」古田は靜子の方を顧盼つた。

「隨分探し出すのに骨を折らしやがつたが、それでも手に入れば何より重疊だ。其のまゝで可いから、あの別莊まで連れて行つて貰はう。連れて行つたら、直にあの離座敷へ放りこんで、堅固と締りをして置くんだぞ。脫け出されちやあ、又事だからね」

「宜しい。今度は何奴も繫累なしだから至つてお誂え向だ。愈々本望相達しの時機到來ですな」と古田は厭な笑ひをした。

「だが隨分變つたもんだな、これが以前滿都の人を騷した立花靜子とは誰でも氣がつくまい」と越田はつく〴〵靜子を見た。

「誰でも氣のつかないのが此方の幸ひでせう。これでも貴下の匙加減で以前のものになれば又世間の奴等が羨ましがりますよ」

「其の目的でこんなに強らい苦勞をして居るんぢやないか、兎も角も、邪魔の無い間に疾く連れて行き玉へ」

二人が談して居る間も靜子は立いたり笑つたりして、ともすると、摑んで居る古田の手を振りきつて駈け出さうとする。

「オイ靜子さん、今日からは愈々越田醫學士の夫人ですせ。サアお來でなさい」と無理矢理引つたてゝ連れて行かうとする。

「あゝ、あれ、救けて下さい。國衛さん。妾は決して不貞な事をした事はありません、それは貴夫が誤解です」と靜子は行くまいとして身を悶掻いて居る。

「喧しまい、默つて來るのだ」と古田は力限り引き摺る如にして行く。

今しがた船からあがつて來た甚兵衛は偶と立ちどまつた。

「ハテナ、あの女に相違無えだぞ」

（四三）滴る血（三）

秋晴れの暖な暑の溫味に、額から浸み出す汗を拭ひながら、濱傳ひに行く二人連れ、それは國衛の兄の一忠と、靜子の兄の進とである。

「ねえ進君、警視廳へ頼んでもあんな冷淡な事では何にもならないね」

「然ですね、否、警察なんて然したもんですよ。犯人の檢擧とか、罪人の逮捕とかつまり自分の手柄になる事だつたら大いに奔走も致しそうですがね、家出人の捜索や、行衛不明者の探捜なんかは、ほんの形式に受附けたと云ふだけで、てんで捜さうともしないんですからね」

「どうも然らしいねえ。然し、こりや仮且受附けた以上は、十分手を盡してくれるのが眞實だらうと思ふがね」

「本統なんですが、行らないから駄目です。靜子の事でも然ぢやありませんか、警

察の方では全然手もつけて居てくれなかつたのですからね。貴下の方からあの秘密探偵社の方へ依頼して下すつて、其の方の手で漸と静子が此の方面へ來て居るらしいと云ふ事が判明つた程ですから、どうしても形式ばかりのお官所向より民間の熱心に行る方が好いですね」

「然し、保護と云ふ様な段取になると、どうしても官廳でなけりや駄目だから、一得一失で完全にならないもんと見える。處で静さんは什麼したんだらう、先制彼處で訊いた所に據ると、確に此の邊を迂路ついて居るに相違ないらしいが、これだけ歩いて出會さないのは、又何處かへ行つてしまつたのぢやなからうか」

「然ですねえ。だが、まだ今朝、あちらで彷徨あるいて居たと云ふのですから、いくら何でも然早く遠方へ行く筈はありますまいがね……幸い、彼處に漁師らしい者が居ます、あれに訊いてみませう」

「訊いて見玉へ」

進はつか〳〵と前へ出た。

「爺さん、失敬だが些とお尋ねしたいんだが……」

「何だかね？」網を軒先に擴げて居た老爺は黒い顔を擡げた。

「突如だが、若し、此の邊へ二十あまりのあまり身なりの卑くない狂人が來やしなかつたかね」

「女だが？」と、老爺は進の顔と、一忠の風彩とを見上げ見下して居る。

「女だ。若い女だ。兒供を抱いて居る筈だ」

「兒供を抱いてる？……仍且あれだ……」と手に持つた網を落した。

「知つてるかね、見た事があるかね」

「あるだあよ。今だ。其濱邊で巡査さんが其の狂人を連れて行かうとするのを一人の男が來て、俺が親類だから渡してくんろつて巡査さんから受けとつて連れて行つたゞ」

「親類の者が？……」進は怪訝な顔をして一忠の顔を見た。

「おい爺さん、其の男と云ふのはどんな態なものだつた」一忠は急く如に訊ねた。

「四十五六の汚え髭のある男だ。其れに最一人連もあつただがね」
「妙だね、誰だらう。若しかすると其の女と云ふのが靜子以外の他人ぢやありますまいか」と進は疑ひ出した。
「然かも知れん。然し、兎も角、其女を連れた男の後を追つて見りや分るぢやないか」
「然です、然しませう」と進は爺の方へ「爺さん、其の男はどちらの方へ行つたか知らないか」
「其の路を眞直に、別莊へ連れて行つて離屋敷へ入れるとか云つてたゞから、此の近い處に居るに相違無えだ……俺も行くべえ、俺も些くら氣にかゝる事があるだから」
「然か、ぢやあ一緒に、案内を頼むよ」と一忠は足を返しながら暫と門札を見て
「都築甚兵衛……爺さん、お前は甚兵衛さんと云ふのかね」

（四四）滴る血（四）

「此の家へ連れて這入つたゞよ」と、二三人の子供が先に立つて案内する。
「此家へ連れて這入つたゞか、それに違え無えだな」と甚兵衛が暢然門を潜る後らか一忠と進が這入つた。
「俺が訊いて見べえか」と甚兵衛は二人を顧盼る。
「よし、僕が訊く」と云ひつゝ一忠は玄關口に立つて「頼む」と、號令する如な大きな聲。
何の答辭もない。
一忠は進と顔を見合して、四邊を廻と見た自然木の小さな門から玄關まで小砂利が布いてあつて、其の両側へ草花が植ゑてある。右手の低い生垣を越して種々の花樹が不規則に植ゑこんであるのが見える。屋敷内は左まで廣くはないと思はれるの

に、今の案内の聲か通じない筈はない、と思つた一忠は又大きな聲を出した。

「頼む」

「あゝ」と奇妙な答辭をして漸と顔を出した。

「呀、古田ッ」と進は飛びつく如に云つた。

「呀ッ」と古田は進の顔を見て狼狽した。

「靜子が來て居るだらう」と進は最う玄關へ昇つた。

「靜子？、そんなものは知らん」古田は空呆けた。

「知らん筈はない。君が來て居るなら、それで大抵の推察は出來る。靜子を出し玉へ」と進はじり〳〵と寄つた。

「オイ爺さん、最前お前が見たと云ふ男はこの男かね」と一忠は甚兵衛を顧た。

「この人だ。相違無えだ」云ひつゝ甚兵衛は前へ出て「最前濱で、巡査さんから狂人の女を俺が親類だつて連れてござらしたのはお前さんでねえか、俺船から見て居たゝ」

「何を云つてやがるのだ。我輩はそんなものは知らん」

「知らん筈はねえだ。お前樣と、最一人とで拉ばつて來たでねえか、離座敷へ入れた事も知つてるだあよ」

「エ？、離座敷へ……」古田は驚いた。

「おい、古田君最一人の男と云ふのは越田醫學士だらう。氣の狂つて居る靜子を無理に連れこんで自由にせうとするのは、餘り獸的ぢやあないか、越田君に然云つて靜子を返したまへ」

「そ、そんなものは居ないと云つて居るのが判らんか」古田は肩を聳かした。

「何處までも君は隱さうとするのか」と進は早拳を握つた。

「待ち玉へ」と一忠は進を止めて「古田君とやら、君も見た所全然譯の分らない人でも無ささうだが、お互に手數をかけて氣まづい感ひをして、それから要求を入れると云ふのは誠に愚な話ぢやありませんか。總てが、隱して隱し了せるものでなし、亦、隱したからそれで好いわと引きとるものでなし、判明つて居る事を然手數を掛

げずに早々と埒を明けたら如何でせう」

「それは什麼云ふ意味ですか、何にも知らない僕にはとんと譯が分りませんね」古田はどこまでも白裝をきらうとする。

「云はなきや云はなくても好い」と氣の短い進は突如古田の首筋を引掴んだ。

× × × × × × × × × ×

六畳と八畳との離座敷は雨戸を緊と締めきつて、母家へ通ふ廊下口のみが障子にしてあるので、室の中は薄暗い。

靜子は中仕切の襖に背を靠して潸々と泣いて居る。

靜子の手を緊と握つて、凄い如な笑を浮べて居るのは越田逸郎である。

「靜子さん、氣を靜めてお聽きなさい。僕は貴婦の病氣を癒してあげて、僕の妻にしてあげるのです。ね、お悅びなさい」と肉に飢えた狼の如な眼が怪しく光つて居る。

越田は軈て、袂から小さな瓶を取り出した。その栓を拔いて片手に持つて、軀を

悶掻く靜子を片手に抱きしめて瓶を靜子の鼻の頭につけた。

刻、一刻、靜子はいつしか死人の如に眠りにおちて行く。

越田は又、にたりとした。

（四五）滴る血（五）

靜子は頽然となつた。

越田は凄い笑ひを漏した。

靜子の軀は仰向けに寢かされた。

「先生、來ましたぞ」呶鳴りながら飛びこんだのは古田である。

「來た？」と越田は爪にかけた小鳥を鷲に奪はれた鷹の如に眼を光らした。

「疾く、疾く、出て下さい。でなけりや此室まで這入つて來ます」

「誰が來たのだ」

「誰がどころぢやない、進が佐久良大尉を連れて來て居ます、玄關から追つ拂はふと思つても、濱で見て居た親爺がついて來て、喧々喋つてしまつたので、僕の手腕では利きません。疾く出て下さい。此室まで來られちや益々免倒です」

「邪魔な奴等だ……」と越田は殘り惜しさうに寢て居る靜子を顧盼りながら立つて

「ぢやあ僕が會ばふ」

「此女は此のまゝで宜いですか」

「其のまゝ放つて置いても大丈夫だ」と越田は室を出た。

其の後から古田も從いて出た。

薄暗い室の中には死人の如な靜子の體軀のみが横はつて居る。

離座敷を出た二人は急いで玄關へ出やうとすると、一忠等が最う母屋の座敷へ來た居た。

「呀、來らつしやい」と越田は態と咎めの言語も出さずに叮嚀に頭を下げた。

「失敬する。僕は一度お目にかゝつた事のある佐久良一忠です」

「存じて居ります。まあ何卒此方へ」と越田は一忠等を上座へ招じて古田に座蒲團を出させたり、茶、菓子まで出させたりした。

「早速要談に移る」と一忠は出された茶碗を持たうともせず、越田の顏を屹然視て

「貴方の許へ立花靜子が來て居る筈ですね」

「來て居ます」と越田は平然として居る。

「來て居るならお返しなさい」と進は膝を伸り出した。

「お返しする理由はない」と越田は卷莨に火を點けて悠々と煙を吐く。

「理由なんかの必要はない。唯お返しなさればよいのだ。僕はお返しなさいと命令する」と一忠は大きく覆ひかゝる如に云ふ。

「貴下の命令に服從しなけりやならんと云ふ義務は僕にありません」

「ある、靜子を返さなけりや貴下は。不法に人を監禁する罪人だ」

「監禁ぢやない、保護して居るのです。僕は靜子を保護しなけりやならん義務があります」

「義務とは？」

「靜子は僕の妻です。僕はあの靜子の夫です。夫として妻を保護するのです」

「何日結婚した？」と進は急きこむ。

「最う迚と以前です。靜子が發狂しない以前にです」

「そんな事はない」

「と云ふのは貴下等が何も知らないのです。靜子と僕とは直接夫婦關係を結びました。口約のみではない、肉體に於いても……然して、其の證據にと云つて靜子から僕に呉れたのは此の指環です」越田は左の小指を出して見せた。

「それは靜子の指環だ」

「然です。靜子が生命から次だと云つて大切にして居た指環です。これを靜子が、僕と夫婦關係を結んだ時に呉れたのです」

「……」一忠と進とは顏視合はした。

暫時く言語が絶えて寂となつた、三人の男が心々の思ひをもつて。

（四六）滴る血（六）

薄座敷の、光線を遮られた薄暗い室の中に、投げ出された如に横はつて居た靜子は、いづの間にやら覺めて、むつくりと起きた。

盱々四邊を視て居たが、胸惡さうに、唾を吐いて、袖で口の邊を拭きながら蹌踉と起ちあがつた。

床の間にかけた一軸の、誰の筆だか判明らぬが、芦の葉の達磨の顏が、にぶい光線を微に斜に受けて、鋭い眼で室の中を睨んで居る如。

靜子は其の前へ行つて、達磨の繪を眤と視て居た。

「あら、嫌ですわ……ねえ貴夫。そんなに妾を、妾をお睨めなさらなくつても、妾は何にも惡い覺えはないんですもの。あら、怖いわ。怖い顏をなさらなくても好いぢやありませんか」靜子は凝然達磨を凝視めて居たが、急に泣き聲を絞り出し

「もう何卒許して下さい。妾は決して貴夫からお叱りを受ける如な事をした覺えはありません。どうぞ許して下さい。どうぞ、許して下さい」

靜子は其處へ崩れる如に坐つたと思ふと、聲を出して泣き入つた。

と思ふと、突然起つて、両手で空を掻く如にしながら、

「國雄、國雄さん、お前どうしたの、妾を捨てるの？酷いわ。酷いわ。お父様にも捨てられ、お前にも捨てられたら、妾は什麽するの、此の母様はどうするの、ヱ？死んでしまへつて……死んでしまつたら好いの、ヱ、、死んでよ。死んだら、お前のお父様だつて許して下さるわねえ。死んでよ。妾死んでしまつてよ」一足、二足蹌踉ける如に後へ、後へと退つて、間の襖に凭れかゝつた。

それは無意識である。

捨身で凭れた襖は重みに堪へ兼てバタと外れた。

靜子は危く倒れやうとした。がよろ〳〵となつて漸と踏み堪えると、母屋へ通ふ廊下口の障子に眼をつけた。

「ホ、、、」と不意に笑つた其の聲が寂とした室の中に凄く響いて、薄暗がりの床の達磨が圓い眼球をグルリと動かした……かと思はれた。

一足出しては立ち、二足出して、蹌踉となり、靜子は廊下口の障子を啓けた。

母屋の方では誰やらが罵つて居るのか大きな聲がする。

それも靜子の耳には這入つて居ないのか、靜子は廊下から庭へスルリと降りた。

裾が亂れて、長襦袢の端が、切り石へかけた片足の、雪の如に白い脛へ、はらりとかゝつて、模様の紅が、落ちて乘つた花の如だ。

「あら、あら、あんな雲が、あらッ」と靜子は空を視ながら、走り出した。

勝手口の、横に續いた萱下しの下に、炭俵と並んで、薪が十把あまり、その上に載せた草刈鎌が一挺、午後も半過の日光を受けて、煌々と、研ぎ澄ました刃先が光つて居る。

靜子はそれに屹と眼をつけた。

傍へ寄つて、暫時躊躇つて居たが、そーつと手を出して鎌をもつた。

「ねえ、國雄さん、綺麗でせう。お前のお弄物は綺麗でせう。ホラ、御覽なさい、ね、綺麗でせう」

靜子は鎌をもつて庭園の樹立の間をフラ〳〵と廻つた。

勝手口の障子の啓いて居る隙からは下女が焚きつけて竈の下の火がちらちらと覗える。

「あゝ綺麗な花が咲いて居るわ」靜子は何ものにか曳ひ寄せられる如に其方へ寄つた。

井戸傍へでも出て居るのか下女は居ない。

靜子は片手に鎌をもつたまゝで這入つて竈の前へ立つた。

炎々と燃て居る薪を一本、引き出して、莞爾笑ひながら見て居たが、何と思つてか不意に投げ出した。

投げ出された薪は、板緣の上で毒蛇の舌の如な焔をチロ〳〵と立てゝ居る。

靜子は見も返らず走り出して、庭園の中を右、左と彷徨た。時々に打ち振る鎌に

かゝつた枝葉は小氣味よく切り落された。

「火事だーッ」と叫喚の聲。

（四七）滴る血（七）

靜子が今しがた出て來た勝手口からは黑い凄い煙が渦を卷いて吐き出して居る。

「火事だーッ」と叫ぶ聲が續いた。

靜子はそれを餘處に、何か云ひ續けながら、鎌を打ち振り打ち振り庭園を彼方此方と歩いて居る。

美事に咲いた菊の花が、鎌に觸れて、首を落された如に轉りと落ちる。

家の裡では叫喚の聲が物凄い。

吐き出す黑煙が、見るまに白くなつたと思ふと、恐しい毒蛇が吐く舌の如に、火焔がちろ〳〵、ちろ〳〵と見える。

と、思ふ間に、擔傳ひに、最ふ火龍が雲を得た如に走つて居る。

折柄、吹きつける濱風に煽られた黑煙は、低う〳〵、地を這つて、花の中に立つた靜子を包む如に覆ひかゝつた。

靜子は煙に咽んで蹌踉となつた。

軒端を傳つた火焔は風に一層の勢ひづけられて、ぱつと火花を四方に散らして居る。

「アラ、花が、花が、散るわ、櫻の花、桃の花、ほら、散るよ、散るよ。綺麗だわねえ、それ御覽なさいよ。國雄さん、御覽よ。ほら、美しいでせう」靜子は太い松の幹に凭れた。然して笑つて居る其の、美しい、凄い顏！。

「火事だ！」

「靜子は什麼した」

「水だ、水だ」

「呀」

聲が亂れて、瓦落々々〳〵と、燒けて落ちる凄じい物音と、それが混じて、阿鼻叫喚の大地獄を現じて居る。

火は見る〳〵傳つて離座敷へと擴がつた。

寄せて來る人音、叫び聲、狂ふ風の音、其の中を火神は思ひまゝに荒れ暴れ廻つて居るのである。

靜子は莞爾笑つて、

「まあ嬉しいのね、國雄さんが見て笑つて居るわ、綺麗だから可笑いの、ホ、、、笑つて居るわ、笑つて居るよ」と松樹に凭れて軀を搖ぶつて居る。

轟と音した風の力に火焔は吹き附けられて、黑煙がぐる〳〵〳〵と卷いたと思ふとパッと血の如な焔をあげる。

「ヤ、靜子、危險い」と突如手を取つたのは兄の進であつた。

「ホ、、何をしてるのよ、まあ可笑な人」靜子は引かれた手を振りきつた。

「早く、疾く、退かんか、危險い、あれが倒れて來ちや大變だ、疾く、疾く」と進

はまた靜子の手を引掴まうとした。

其の手を不意に拂ひのけて、靜子の手を掴んだものがある。

「呀、越田君、どうするのだ」

「僕の妻を君はどうするのだ」と越田は進を睨んだ。

「何を云やがるのだ。靜子を出せ」と進は拳を固めて立ちはだかつた。

「君こそ退け、靜子は僕の妻だ。愚圖々々すると承知しないぞ」と越田は靜子の手を無理に引いて行かうとする。

「あれ、あれ、國衛さんが……」と靜子は又越田の手を振り切つて、持つた鎌を振り廻した。

「危險いッ」と越田は思はず身を退いた。

「靜子、疾く來い」と進は傍へ寄つた。

「何を爲るのだ」退いた越田も傍へ寄つて進を遮らうとする。

「ホ、、、」と高く笑つて靜子は無闇に鎌を振る。

「危險いッ」と叫ぶ聲と一緒に、

「アッ……」と一聲高い悲鳴。

「ホ、、、」と靜子の凄い笑い聲が疾風の如に走つて聞えた。

地軸を裂く如な音響と一緒に家の棟が燒けて落ちた。

（四八）亡き跡（一）

花籠活に投げ挿しにした茶の花が、觸れるものもないのに、ポトリと落ちたのを眦と視て居た俊子は、新らしく湧いて出る涙を、襦袢の袖で拭いた。

「國雄さん、何卒妾を許して下さいね」と抱いて居る國雄の頭を片手で撫でながら

「妾は國雄さんのお父樣を殺したのですつて……妾は國雄さんのお父樣に幸福があれとお願ひはして居ましたけど、お父樣を殺さうと云ふ意志は毫頭有つた事はありません。だけど、お父樣が西藏なんかへ行つて了はうと御決心なすつた其の原因と